

dante

文藝 a j o

2010 又冊子

VOL.2



Contents

music

音楽室の女神様 秋月カンナ 3

BalletMecaniqueーバレエ・メカニックー

井眼 16

moon

翼 霧島都 33

ルーナ 佐藤田中 36

音樂

「なあ、知ってるか？ この音楽室の噂」

「誰もいないはずの音楽室から、夜な夜なピアノの音が聞こえるってやつだろ？ 昔自殺した女子生徒がどうとか」

「そう。その幽霊がピアノを弾いてるらしいんだけど、それを目撃してしまつたら闇の世界に引き込まれて、二度と元の世界に帰れないらしい」

「あれ？ 俺が聞いたときは確か、それを目撃した人が魂抜かれて、一生精神科病棟に入院してるとか何とかって話だったぞ」

先生が前でしゃべってるって言うのに、一番後ろに座ってるこいつらは、そんなくだらないことしゃべってるのか。しかも、こんな意味のわからない噂を信じるなんて、よつぼどの馬鹿だ。ほかのやつらもこそこそしゃべりやがって。先生も注意すればいいのに。

こいつらが話している噂の元凶はアタシだ。でも夜に弾いているのは、夜にしか弾けない理由があるからで、闇の世界に引きずり込まれた、魂抜くのだ、あり得るわけじゃないか。作るならもつとマジなストーリーを考えてほしい。

授業の終わりを知らせるチャイムが鳴ったかと思えば、高校生どもはすぐに教室を出て行った。残された白髪頭のおじいさんは、片づけをした後、ため息をひとつして、静かに教室を去って行った。あの先生はこの学校に来て随分と経ってる。昔はハンサムだったんだけど、時間というのは怖い。その頃のフレッシュさは微塵も残ってない。

放課後になり、吹奏楽部の生徒がぞろぞろと集まり、それぞれ個人練習を始めている。こつちでも練習そつちのけでしゃべってるやつがいる。真面目にやらないから、いつまで経っても正規メンバーに選ばれないんだつもの。こつそり注意してやろうか。あ、部長に怒られた。アタシの出番はないか。

練習も終わったようだ。みんな少しずつ教室を去っていく。

教室に誰もいなくなっても、まだ動けない。先生たちが校舎に残っているからだ。だからピアノを弾きたくても弾けない。あー早く弾きたい。早く練習がしたい。けど我慢だ。前に校舎に人がいるのを気にしないでピアノを弾いてたから、見回りの先生に音色をバツチシと聞かれていたようだ。そのときから「夜に誰もいないはずの音楽室でピアノを弾く音がする」という噂が流れた。そこに尾ひれがついて、現在のような噂が広まっている。アタシが蒔いた種だからしょうがないけど、これ以上変な話にしないようにしないと。

見回りに来た先生が、音楽室のドアのカギを閉めた音がした。これから飲みに行こうとかつていう声が聞こえる。声から察するに、体育科のマッチョだ。この前子供が産まれたつて言つたのに、飲みに行くなんて。奥さん大事にしてやりなよ。ダメな旦那だ。

ただ、カギを閉めたつてことは、もうそろそろ校舎には誰もいなくなるはずだ。窓から見える駐車場にはほとんど車は残ってないようだ。見回り組も、車に乗って走り去っていくのを確認した。今日はマッチョたちが最後のはずだから、もうだれも残っていないだろう。

これで心おきなくピアノが弾ける。ピアノにかかっている布を外し、

ふたを開け、椅子に座り、さあピアノの時間の始まりだ。……と言っても、楽譜はない。けど、楽譜がなくても覚えてる曲であれば見ないでも弾けるもんだと、ここで弾き始めたときはよく思った。そんなことができるアタシは、きつと天才だ。そうに違いない。

楽しい。ピアノを弾くのはホントに楽しい。何も考えなくてすむ。

その世界に入ってしまったえば、周りなんて気にならなくなる。自分が無になれる。気持ちいい。最高のひとときだ。

ただ、いくらアタシが天才だからって、覚えてる曲の数には限界がある。たまには知らない曲を練習したい。さすがに同じ曲を弾き続けてるのにも飽きてくる。楽しいことには変わりないけど。

*

私としたことが。どうしてこんな日に限って学校に忘れものなんてしてしまったんだろう。明日は数学のテストなのに、教科書もなくてどうやって勉強しろというのか。つくづく自分の鈍くさが嫌になる。学校に着くと、中は真つ暗だ。門もすっかりと閉められていて入ることが出来ない。想像はしてたことだけど、今はまた夜の九時をまわったところなんだから、先生が誰か一人くらいいてくれてもいいじゃないか。

「やっぱ諦めるしかないのかなあ」

誰に言うでもなくそうつぶやく。けど、独り言を言っていると余計淋しくなった。夜中に学校なんか一人で来るんじゃないかった。

帰ろう。明日の数学は諦めよう。どうせ勉強したってわかりっこな

いんだ。そもそも微分なんて、覚えてたって社会の何の役に立つというのか。そう自分に言い聞かせ、門に背を向け帰ろうとした。

そのとき、微かにピアノの音色が聞こえてきた。どうやら学校内から流れているようだ。誰かいるじゃないか。こんな時間に何をやってるのか。門を何とかよじ登り、校内への侵入に成功した。

校舎をぐるぐると周り、どこか閉まっていない窓はないかと探した。奇跡的に開いている窓を見つけ、靴を脱ぎ中に入る。廊下の床は冷たくて、靴下だけではつらかった。下駄箱に行き、上履きを履いて、いざ音楽室へ！ 教室なんて後でいい。こんな時間にピアノを弾いているのは誰なのか。私の関心は完全にそっちに向かっているのだ。

廊下を歩いていて思ったのだけど、人がいない学校というのは、なぜこども冷たく感じるんだろうか。冬だから？ 電気も何もなく暗いから？ 今は月明かりと、外にある街灯を頼りに歩いているけど、そんな微かな光が、歪計にここを冷たく、淋しく感じさせるんだろうか。音楽室に行くにつれて大きくなっていくピアノの音色がなかったら、私は怖くてここに居られないだろう。この音楽には人を引き付けるものがあるのかも……。

音楽室に到着。やっぱ、この中から聞こえてくる。ドアを開けようとするけど、カギは閉められていた。開かない。それならばと思い、ドアの上にある窓に手を伸ばす。ガラガラと音を立てて、窓が動いた。開いた！ 私は周りを見渡して、足場になるようなものを探した。ちょうど近くにゴミ袋を発見した。中身はシュレッダーにかけられた紙くずが溢れそうになるほど入っている。袋の淵を伸ばして、無理や

り閉められているそのゴミ袋の上に、試しに全体重をかけて乗ってみる。意外といける。私は入口までゴミ袋を持っていき、上に乗り、窓の淵に飛び乗った。踏み込むときに、プチっという不気味な音がしたので、後ろを向いてみると、ゴミ袋が破け、中の紙が溢れていた。

……見なかったことにしようと心に誓った。

さて、やっと音楽室に侵入できる。窓から飛び降り、服に付いたほこりを払って立ちあがると、

「何やってんのかな、こんな時間に」

前を見ると、目の前には白いワンピースを着た女の子が立っていた。侵入することに必死で、ピアノの音色が止まっていたことに気づかなかった。

「ばれちゃった？」

「あんな大きな音出しといて、ばれない自信あったの？」

……それもそうだ。気付かないほうがおかしい。

「夜中に学校に忍び込むなんて。あんた何？ 泥棒？ 音楽室に入って楽器類でも盗もうっての？」

立ちあがった私を見上げながら、女の子は言った。身長は私の肩ぐらいだから、私が百六十五センチだし、だいたい……。

「ちよつと！ 聞いてんの？」

考え事をしていると、女の子は大声で怒鳴ってきた。けど、この子も夜中に忍び込んでピアノを弾いていたわけだ。私より怪しいじゃないか。見るからに中学生くらいいの、この女の子のほうだ。

「あなたは どうしてここにいるの？」

電気をつけながら極力落ち着いて、その子に話しかけた。腕組みを

して仁王立ちなんかしちゃって随分偉そうだけど、明らかに私より年下なのだから、私が少し大人にならないと。

「……あんた、年いくつ？」

「え？ 今年で十七になるかな？」

「てことは、今高二だよな？ アタシは十八人だけだ！ あんた、あからさまにアタシを年下に見てたでしょ？」

「え、ええ！ それじゃあ、今高校三年生？」

フンつと後ろを向いて女の子、もとい先輩は黙ってしまった。

「い、いやすみません。先輩なんて気づかなくて。でもどうしてこんな時間に音楽室でピアノなんか弾いてたんですか？」

「あなたに何か関係あるの？」

……依然として先輩は機嫌が直らない。そりゃ間違った私が悪いんだけど。先輩は童顔をそんなに気にしているのか。

「で、あんたは何しに来たの？ ホントに盗みにでも来た？」

私に向き直り、先輩は言った。

「違いますよ。教室に忘れ物をしたから取りに来ただけです。ピアノの音が聞こえたから、誰が弾いているのか気になってここに来たんです」
「だったら早く忘れもの持って帰んなよ。アタシの大事な時間なんだから」

「ずつとここで弾いてたんですか？」

「そうよ」

「何時から？」

「えっと、先生達が帰ったあとだから、だいたい八時半とかそのくらい……って、あなたに関係ないでしょ！」

「なんでこんな夜中に？ 一人でピアノの練習して、淋しくないんですか？」

先輩は考え込む格好をした。うーんとうなったかと思ったら、
「淋しいなんて、そんなこと考えたことなかった」

なんて、真顔で言ってきた。

「アタシはいつもここで弾いてるけど、淋しいなんて感じたことなかったな。ピアノを弾いてる時間は、周りなんて気にならないし。昔っから一人だったしね」

あつげらかんとそう言う先輩は、本当に淋しくないというような顔をしていた。私に表情の裏まで読み解くなんて出来ないけど、見かけからはそう感じられる。

「あんた、名前なんて言うの？」

「橘マリです。先輩は、お名前なんて言うんですか？」

「アタシ？ アタシは……」

先輩は考え込んだ。自分の名前なのに、なぜ考える必要があるのだろうか？

「……アタシは、女神さま。そう、音楽室の女神さまだよ」

「め、女神さま」

……痛い。痛過ぎる。確かに黒髪のロングストレートに白のワンピース。肌も白いし、体の線も細い。顔もクラスの男子が好きそうな、か弱い感じのかわいい女の子だ。私が男なら、守ってあげたいって思うかもしれない。そうかもしれないけど、でも自分で自分のことを女神だなんて、普通言うか？ 言わないよ。というより言えないよ。私、かわいいでしょ？ って、宣言してるようなものだ。先輩はそんなに

自分に自信をお持ちなのか。さつきからそうだけど、確かにこの人々となく自信家って感じがする。そう考えれば、ある意味この人は神様級なんじゃないだろうか？ 神様級の自信家。そうだ。そういうことにしよう。相手は先輩なんだし。

「どしたの？ 固まっちゃって」

なんとか無理やり自分を納得させていると、先輩、もとい女神さまが不思議そうにこちらを見ている。

「あ、いや、何でもありませんよ。大丈夫です。め、女神さま」

「……ぶつ、はっはっは。本当に女神さまって呼んでくれるなんて思わなかったよ。冗談を間に受けないですよ」

女神さまは、お腹を抱えて笑いだした。ここでの正解は突っ込んだほうが良かったのか。

「あんた面白いね。うん、気に入った」

女神さまに気に入られた。そんなに面白かっただろうか。この人がよくわからない。

「ちゃんと名前教えてくださいよ。なんて言うんですか？」

「え？ 内緒」

につくたらしい笑顔で、女神さま（もう女神さまでいいや）はそう言った。先輩をこんなにむかつくと思ったのは、この人が初めてだ。

「それじゃあ、私は帰りますね」

来てあまり時間は経ってないけど、ピアノを弾いてる人に会うという目標は達成されたわけだし、早く教科書を持って帰ることにした。女神さまとしゃべっていると、なんか疲れる。

「おっと、ちよっと待って。あんたにお願いしたいことがあるんだけど

「お、おう」

「なんでですか？」

ちよつと機嫌の悪い声が出てしまった。

「なんで不機嫌になつてんのよ」

女神さまだって、さっきまで不機嫌だったじゃないか、とは言わない。我慢我慢。女神さまは先輩なんだと、自分に言い聞かせる。

「明日このくらいの時間に、楽譜を持ってきてくれない？」

「楽譜ですか？」

「何でもいいからさ。もちろんタダとは言わないよ。勉強教えたり出来るし」

「勉強……教科は何でも大丈夫ですか？」

「まあ、大体のやつは得意だよ」

「それなら、明日数学の小テストなので、教えてもらえますか？」

「いいけど、こんな時間だけど、あんた時間大丈夫？」

「大丈夫です。すぐに取ってきます」

数学が大の苦手な私が、このチャンスが逃げすわけにはいかない。

ここ最近数学は赤点続きだから、これ以上悪い点は取れない。友達に頼もうにも、レベルはどっこいどっこいで頼りにならない。「文系だもの。BYあいだみつを」って馬鹿言ってる友達もいた。そんなことで笑える時を超えちゃまったんだ。薬にもすがら思ひなんだ、BY橘マリ。

私はドアのカギを開け、ぼろぼろになつてるゴミ袋を横目に、教室まで走った。

急いで走って戻ってくると、私は女神さまに教科書を渡した。

「よろしく願います。女神さま」

「お、おう」

若干引き気味に、女神さまは受け取った。

「んで、範囲はどこ？」

「微分のとこなんですけど」

「あんなの簡単じゃん。パターン少ないんだから、覚えちゃえばいいたい解けるんだし」

それから勉強会が始まった。女神さまの教え方はとてもわかりやすく、微分の意味すらわからなかった私が、グラフの傾きを理解できるまでに成長できた。ときどき、「あんた、こんなことも分かんないの？」と怒鳴られ、内心ビビってはいたけど。

「もう十時過ぎたし、ここまでにしとこうか」

そう言われて、時計を確認した。勉強会を始めてから一時間あつという間に過ぎていたのか。言われるまで全く気付かなかった。

「ありがとうございます。ピアノの練習中だったのに」

「いいよ。どうせ、あんたが来たから集中できなかつたらうし」

微笑みながら、女神さまは言った。

「ありがとうございます。それじゃ、明日楽譜を持ってきますね」
もう一度言つて、お辞儀をし、私は音楽室を後にした。

門の近くに来たとき、またピアノの音色が聞こえてきた。今更だけど、女神さまはいつまで弾くつもりなのか。きつと、少し弾いたら帰るんだろう。

そんなことより、すぐに帰って楽譜を探さないと。子供のころピアノを習ってたときがあるはずだ。

*

嵐のように過ぎてったな、あの橘つて子。一体何だったんだろう。

教えてるあいだ、ずっとアタシのことを女神さまって呼んでた。自分で言っておきながらなんだけど、かなり恥ずかしい。言わなきゃよかったって、今更ながら後悔してる。アタシは自分で自分を苦しめる傾向にあるようだ。あの子には、今度会った時には注意しとかなないと。

にしても不思議な子だ。アタシがこんなに誰かとしゃべったのなんていつ振りだろう。普段はしゃべる機会もないから。

でも今はそんなことはどうでもいい。またピアノの時間を再開させよう。あの子のせいで、だいぶ時間が取られちゃって、今日は思ったよりピアノを弾けてない。このままでは欲求不満になってしまう。アタシは、またピアノの前に座った。鍵盤に手を置き、さあピアノの時間の再開だ。

……おかしい。ピアノを弾いていると、楽しくて心地よいはずなんだけど、いつもと何か違う。音楽室の暗闇が、今日は気になって仕方がない。外からの光でピアノが見えなくなることはないけれど、妙に静かに感じるのほなせなのか。これが淋しさなのだろうか。

……考えてもよくわからないことは、これから考えたって答えは出ない。それならそれでわからないままでもいい。アタシは、前と同じように、ピアノの世界に没頭していった。

*

夜中過ぎまで楽譜を探し、女神さまから教わった通りに数学を勉強した。次の日の数学のテストは、久しぶりに手ごたえを感じることが出来た。あとで女神さまにまたお礼をしなくては。夜中に来てくれとは言われたけど、今から会いに行ってもいいはずだ。

お昼休みご飯を早々に食べて、私は三年生がいる四階に向かった。

一つ一つの教室をのぞいてみるけど、女神さまの姿は見つからない。先輩の誰かに聞こうにも、女神さまの本名を知らないから、ちよつと聞きづらい。さっきから周りの視線も気になる。私がかわいいから……じゃなくて、三年生のところに二年生がうるちよろしたら、そりや気になる。さすがに居たたまれなくなつて、私は女神さま探しをあきらめた。

下校時にこつそり窓を開けておいて、夜中にそこから侵入した。見回りが甘くて助かった。

今日もピアノの音が聞こえる。あらためて聞くと、女神さまはピアノが上手だ。すごく滑らかに音色が響いてくる。

音楽室の前に着いた。ドアを開けようとするも、開かない。私に来るのは分かっているのだから、ドアを開けておいてくれてもいいのに。

「女神さま。開けて〜」

ドアをノックしながらさういうと、ピアノの音は止まり、小さいシルエットがドアの前に現れた。

「待ってたよ」

内カギが開けられ、女神さまと目が合ったかと思つたら、女神さまは右手を出してきた。

「ほれ、早く頂戴」

「え？ 何をですか？」

「あらそう」

女神さまはそれならいいばかりに、ドアを閉め始めた。

「ああ！ 嘘です嘘ですごめんさい。ちゃんと持ってきましたよ。

ほら」

私は鞆から楽譜の束を取り出し、女神さまに渡した。

「随分と持ってたね。昔ピアノやってた？」

「中二までやってました。だから書き込みとかだいぶしちゃってるんですけど」

「ううん、大丈夫大丈夫。読めればどうにでもなるから」

女神さまは楽譜を楽しそうに眺めていた。

「へー。バツハにシヨパン、子供のころやってただけあつて定番曲が多いね」

「でも楽譜って楽器店に行けばいくらでも買えるじゃないですか。買

いに行かないんですか？」

「え？ ああ、そうね。忙しくて」

女神さまは苦笑いしている。こんな時間にピアノ弾く時間はあるん

だから、いくらでも買に行けると思うんだけど。

「あ、これ」

楽譜を見ていた手が止まった。どうしたんだろうと思ひ、その楽譜

をのぞいてみる。バダジェフスカの「乙女の祈り」だった。

「その曲いいですよ。私の曲好きなんです。比較的弾きやすい

曲だったから何度も弾いてました」

「そう……」

女神さまは少し暗い顔をしたかと思うと、窓の近くにあるピアノに

向かっていった。

「せっかく楽譜もらったことだし、ちよつと聞いてく？」

「いいんですか？」

「今日は月もきれいだし、まずはベートーベンの月光にしようか」

そういうと、ピアノの前に座り、女神さまは弾き始めた。

心地よいピアノ曲をいくつか聞き、それからたわいもない話をした

あと、私は音楽室を出て行った。

家に向かいながら、一瞬見せたあの暗い表情について考えていた。

何か悲しそう、それでいて懐かしそうな顔だったから。女神さまは、

あの曲にどんな思い出があるんだろうか？

それから、週に二、三回のペースで音楽室に通った。女神さまのピ

アノを聞いたり、勉強（主に数学）を教えてもらったり、普通の会話

だけの日もあった。最初のころは「用もないのに何度も来るな！」な

んて怒鳴られたりしたが、今では「今度はいつ来るの？」って聞いて

てくるようになった。

「あんたといえるのも楽しいや」

ある時、女神さまはそんなことを言ってきた。

「前はピアノを弾いてる時間だけがアタシを解放できる時間だったけ

ど、あんたとしゃべってる時間も、それはそれで楽しいよ」

女神さまは満面の笑みでそう言ってきた。普段は褒めたりしない女

神さまがそんなこと言ってくるなんて。

「明日は嵐でも来るんじゃないですか？」

「そういうと、教科書で叩かれた。しかも角で。」

「今日体育の時間にしゃべってた人、あれ、彼氏？」

十二月に入り、夜中いつものように二人でしゃべっていると、女神さまは突然聞いてきた。飲んでいたお茶を吹き出しそうになった。

「か、彼氏？」

「しゃべってた子いたじゃん。背が高くって色黒の、いかにもスポーツマンって感じの子とさ」

女神さまが言っているのは、おそらく石山君だ。体育の準備を一緒にやっていたのだ。うちのクラスの子で、サッカー部のキャプテンを任されている。男女どちらからも人望があり、いつも落ち着いている。他の男子よりも大人に感じる。密かにファンクラブができるほどの人氣ぶりだ。

「い、いや、彼氏とか、そんなんじゃない」

「あれ？ 違うの？ あ、でも確かに、あんたかなりあたふたしてたもんね。付き合ってたあれはないか」

「ハハッ」と声を出して女神さまは笑った。

「いつの間に見てたんですか？」

「窓から外眺めてたら見つけたんだよ。じゃああれだ。あんたの片思いつてやつだ」

指さしながら女神さまは言った。私は目をそらしつつむいてしまった。

「ハハッ。耳まっ赤だよ。あんたわっかりやすいねえ」

「またもや女神さまはお腹を抱えて笑いだした。よく笑う女神さまだ。」

「も、もういいじゃないですか。その話は」

さすがに恥ずかしくなって、私が止めようとすると、女神さまは笑い終えたのか、私を向き言った。

「あー面白い。じゃあさ。アタシがとっておきの恋愛必勝法を教えてくださいよつか？」

「え、そんなのあるんですか？」

笑すぎたのか、涙を拭いながら言う女神さまに、私は身を乗り出して続きを待った。

「ズバリ！」

「ズバリ？」

女神さまは顔を近づけてきた。鼻がつきそうになるくらい近づくと、女神さまはニコッと笑った。

「ストレートに告白すればいいんだよ」

「はあ？ え、それだけ、ですか？」

「うん。それだけ。しいてあげるなら、相手の目をしっかりと見て、ちゃんと自分の気持ちを伝えること」

思ったよりも普通のアドバイスだったので拍子抜けしてしまった。

本当にそんなことでこの恋が成就するのだろうか？

「告白するまでに何かないんですか？ 相手をこっちに振り向かせる方法とか」

「ない。というより、あなたには必要ない」

「そう言い切られてしまうと、返す言葉が失ってしまふ。」

「大丈夫だって。絶対成功するってアタシが保証するからさ」

どこにそんな根拠があるんだろうか？ 自信満々な様子の女神さまは、私の肩を叩きながらそう言った。

「そんで、もし告白するんだったらさ。外の掲示板の前でやってくれない？」

「何ですか？」

「そこだと、ここから見えるんだよ。だから告白に成功出来たら、アタシがここからお祝いの曲を演奏してあげるよ」

「あ、それいいですね」

「それじゃあ、明日の昼休みに実行しようか」

「あ、明日ですか？ そんな急に……」

大丈夫大丈夫と言いながら、女神さまはピアノに向かい、エリーゼのためにを演奏し始めた。曲に合わせて、「何とかなるよ」なんてヘンテコな歌詞をつけながら。

かくして、私は告白をすることになった。

次の日の朝はとても憂鬱だった。今日石山君に告白をする、そう考えるだけで足が震えた。

学校に向かいながら、どうしようどうしようとずっと悩んで、信号が赤なのに渡ろうとしていた。車が目の前を通ってようやく気付いた。危うくひかれるところだった。そこで目を覚まし、それから無事に学校に着くことができた。

けど、教室に入ってから悩みは尽きない。友達としゃべっていても、全く話が入っていかない。

「おはよー」

背の高い、色黒の男の子が入ってきた。石山君だ。いつも見るだけで緊張してたけど、告白するって決意してるわけだから、余計緊張する。

とにかく、話しかけて昼休みの約束を取り付けなければ意味がない。私は意を決して、石山君のもとに向かった。

「あ、あの、石山君」

「うん？ 何？」

「あ、あのさ……あのね……」

どうしよう。言葉が出てこない。頑張らなきゃ。

「橘？ どうしたの？」

心配そうに石山君は私を見つめてくる。そんなに見られると、余計言葉が出てこない。

「あ、あの、今日の昼休みに校庭の掲示板前に来てくれる？ ちょっと話したいことがあって！ それじゃー！」

そう言い切ると、教室を出てトイレに向かった。鏡を見ると、顔が耳まで真っ赤だ。こんなことでこんなに苦労してるのに、果たしてこれで告白なんて出来るんだろうか？

こんな状態で教室に帰りたくないけど、授業をさぼるわけにもいかないの、教室に戻った。石山君のほうをちらつと見ると、何事もなかったかのように友達としゃべっていた。女神さまの言うとおり、本当に告白して成功するんだろうか？

あつという間に昼休みになってしまった。タイムワープしてしまっただんじやないかってくらいだ。友達を机をくっつけてお昼ごはんの準備

備をしている。それを横目に、私は教室を出て校庭に向かった。

まだ昼休みが始まったばかりだからか、校庭には人はあまりいなかった。掲示板の前に着いたけど、まだ石山君は来ていなかった。座って待つてようと思つたが、落ち着かなくて掲示板の前をうろろろしていた。

緊張しながら待つていた。ふと上を見ると、下を眺めていた女神さまと目が合った。クスクスと笑つていゝ。いつもの女神さまだ。

「ごめん。待たせた」

石山君がやつてきた。ついにこのときがきた。

また上を見上げると、頑張れという口の動きとともに、こぶしをグーにして、女神さまは励ましてくれた。

女神さまが見守つていてくれる。大丈夫。ちゃんと自分の気持ちを石山君に伝えるんだ。そう自分に言い聞かせ、私は石山君のほうを向いた。

「ごめんね。急にこんなとこに呼び出して」

「いや、全然大丈夫だよ。それで、話つて何？」

「私、私ね」

覚悟を決め、石山君の目をしっかりと見つめた。

「私、石山君のことが好きです。私と付き合ってください」

言い切つた。女神さまのアドバイス通り、相手の目をしっかりと見て、ちゃんと自分の気持ちを伝えた。

石山君は驚いた顔をしている。言葉を探しているのか、二人の間に変な間が出来た。一瞬だったんだろうけど、私にはとても長く感じた。

ここから逃げ出したいと思いつつ返事を待つていゝと、石山君はよ

うやく口を開いた。

「橘が俺のこと好きだったなんて意外だったな。えっと、俺も橘のことが好きだったんだ。だからホントに驚いちゃつて」

え？ 今なんと？

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

「は、はい！ よろしくお願ひします！」

まさか、石山君と両想いだつたなんて。もう幸せすぎて、今の私は空を飛んでるような気分だ。それもこれも女神さまがアドバイスをくれたおかげだ。本当にありがとう、女神さま！

*

あの子、告白に成功したみたいだ。あの浮かれようは、見てるこっちが恥ずかしくなる。

体育での二人の様子を見ていれば、両想いだつたつてことは、きっと小学生でもわかる。いや、幼稚園児でもわかると、アタシは断言できる。相手の態度が、他の女子としゃべつてるときの態度と全然違つから。これで告白が失敗するはずがないんだ。……もしこれで失敗しちゃつたらつて考えてたから、アタシも安心した。

さて、お祝いの曲を弾いてあげなくては。窓を開け、下で浮かれている二人に聞こえやすくし、ピアノの前に座つた。

さあ、なんの曲を弾いてやろうか。アタシはあの子からもらった楽譜をめぐつた。そして、ある曲のところで手が止まつた。

「乙女の祈り」……アタシが避けてきた曲だ。昔からこの曲は好きだ

った。多分楽譜を見なくても弾けると思う。それくらい弾いてきた。でも弾かなくなった。あの子から楽譜を受け取ってからも、この曲だけは弾かなかった。

けど、もういいだろう。あの子もこの曲が好きだって言ってたじゃないか。お祝いなんだ。この曲にしよう。

楽譜を置き、準備をする。少し深呼吸して、さあピアノの時間の始まりだ。

優雅な旋律が、部屋中に響き渡る。とてもシンプルだが、すごく愛らしいこの曲は、アタシの母のお気に入りだった。

母は厳しい人だった。普段の礼儀作法から勉強など、とても厳しくしつけられた。アタシは母の言うとおりに生活してきた。母に逆らわないように、真面目に勉強してきた。いつも完璧を目指した。でも、どんなにテストでいい点を取っても、母はアタシを褒めてはくれなかった。褒めてほしい一心で、アタシは頑張った。

ピアノも母から勧められて始めたものだった。ピアノだけは上手く弾くと、母は褒めてくれた。うれしかった。母が褒めてくれただけで、ピアノから流れるメロディが、世界一の音色に聞こえた。だから一生懸命練習をした。ピアノを弾いている時間は、母を穏やかにしてくれただ。

特にこの曲を弾くと、母はうっとり聞きいつてくれた。時には何時間もこの曲を弾いたこともあった。さすがに母もうっとりとはしてくれなくなっていたけど。

ある日、両親が離婚した。アタシが中学生のころだった。父に引き取られたアタシは、しばらく母と疎遠になっていた。その間も、ピアノは続けた。ピアノを始めたきっかけは母に褒められたからだった。ピアノがアタシの生きがいつてくらい、次第にピアノが好きになつていった。

母と対面したのは、高二の夏だった。母は白い服を着て、棺桶の中に横たわっていた。交通事故だった。当たり所が悪く、即死だったらしい。

アタシは泣き崩れた。どんなに厳しくても、アタシは母が大好きだった。もうなにも考えられなかった。

しばらくやる気のない日々を過ごしていた。それでも少しずつ立ち直つていけるようになった。母もいつまでもこんな態度だったらまた怒鳴ってくるかもしれないと考えたのもある。けれども、乙女の祈りだけは弾くことができなかった。弾くと母の姿を思い出しそうで、どうしても弾くことができなかった。実際、母の姿を思い出しているアタシがいる。

……そんなことを思い返していると、曲ももう終盤に差し掛かった。ふと、頬を涙が流れるのを感じた。いつの間にか泣いていたのだ。アタシが泣くなんて、ホントいつ振りだろう？

あの子はアタシに、色んな感情を思い出させてくれた。最初はよく怒鳴った。数学が全然できてなかったから鍛えがいがあった。

よく笑いもした。あの子としゃべっていると、なんだか楽しくなつてくるから不思議だ。ホント、面白い子だった。

そして悲しみも思い出させてくれた。淋しいって感情も、彼女と会ってから思い出した。あんなに夜が長いなんて思わなかった。

もどから怒りやすいからいつも怒ってはいたけど、他の感情はどれもこれも、あの子が思い出させてくれた。

さあ、そろそろお別れの時間かな。昨日から何となくそんな気はしていた。だから、最後にあの子のうれしそうな顔が見たかったんだ。告白、上手くいってよかった。

自分がだんだん消えていくのを感じる。この世に未練はない。好きだけピアノを弾くことができたんだから。……いや、やっぱり未練かな。せつかく友達ができたのに、もう会えなくなってしまうのは、やっぱり淋しい。

この曲ちゃんと届いているだろうか。今までありがとう。楽しかったよ。橘マリ。

お母さん。今から行くね。そしたら二人で、ピアノ弾こうよ。

*

「あれ？ ピアノの音が聞こえる」

「え？ この曲……」

私は嫌な予感がした。なんだか妙に不安になった。もう二度と会えないような、そんな気がして……。

「ごめん石山君。私、ちよつと行くね」

私は急いで音楽室に向かった。石山君が呼び止めている声が聞こえるが、今はそれどころじゃない。

昇降口に着いた。気合い入れて履いてきた新しい靴がなかなか脱げない。焦れば焦るほど言うことを聞いてくれない。この靴を履いてくるんじゃないかと、今になって後悔した。

やっと脱げて、上履きも履かずに階段を駆け上がった。

女神さまのことを調べていた。

そもそもおかしいところが多すぎた。会うときはいつも夜。それも決まって、私が一人のときだ。戸締りされている校舎からは、中に入らなかつた様子はない。着てる服はいつも白のワンピース。楽譜だつて、外に出られるなら買えるはずなんだ。けど、楽譜を持つてなかつた。

吹奏楽部の顧問の先生に女神さまの特徴を教え、こんな生徒が昔いなかったか聞いたことがある。先生は驚いた顔をしたかと思つたら、詳しく教えてくれた。

二十年前、音楽室の窓から生徒が転落する事件があつたそう。生徒は病院に運ばれて間もなく、息を引き取つたらしい。転落した場所のそばに楽譜が置いてあつたそう。風で楽譜が落ちそうになつて、それを取ろうとして落ちたのではないかと推測された。手垢で汚れているそれは、あの「乙女の祈り」だった。

その話を聞いてびっくりした。不思議に思つて調べていたけど、まさか本当に幽霊だつたなんて、信じられなかつた。だって、触れることができたんだ。勉強を教えてくれた。何度も教科書で叩かれた。ピアノを弾いて聞かせてくれた。あんなに二人で笑いあつた。それなのに、女神さまが存在しないなんて、やっぱり信じられなかつた。

今だって信じていない。女神さまは確かにいるんだ。現にこうやってピアノを弾いているんだから。

音楽室の前に着いた。全速力で走ってきたから、息が切れて苦しい。まだ音楽は続いている。息を整え、私は静かにドアを開けた。

ピアノのほうを向くと、女神さまが優しい音楽を奏でていた。その姿はとても優雅できれいだった。

女神さまは泣いていた。けど、とても楽しそうに弾いていた。心底ピアノが好きなんだ。ずっとこの曲を聞いていたくなった。私は女神さまのそんな姿を、ただ静かに見ていた。

曲が終わりに差し掛かったころ、光が女神さまを包んでいった。そして終わりとともに、女神さまは消えていった。

音楽室は静かになった。私は、もう誰もいないピアノの側まで歩いた。

「橘！」

石山君がやってきた。彼も走ってきたのか、息を切らしている。

「橘が気になって、俺も来てみたんだ」

息を整えつつ、石山君は私の側に来た。

「あれ？ 橘一人？ ピアノを弾いてた人はいないのか？」

「ここにはいないよ。今は私一人」

「さっきまで誰か弾いてたよな？ 誰にもすれ違ってないし。まさか、噂の幽霊か？」

「違うよ」

私は笑いながら、石山君のほうを見て言った。

「幽霊なんかじゃないよ。女神さま。そう、音楽室の女神さまだよ」

窓から風が吹き、ピアノの上の楽譜たちを優しくなでた。

——追想

僕らが一年を過ごした音楽室は、結果として〈世界の果て〉になった。

当時、そこは音と光に、あるいは匂いと温もりに満ちていた。

全てが0と1とで作られた疑似的な空間の中には、間違ひなく（僕ら自身そうであるように）まがいものばかりだったのだけれど、僕にとってそれはあまり重要なことではなかったように思う。

なによりも、そこで感じたことが全てだった。

耳で聞いたもの、目で見たもの、手で触れたもの、鼻で嗅いだもの。

それは顕微鏡や望遠鏡で拡張された世界ではない。

何の力も借りないで研ぎ澄ます僕自身の感覚。それだけを思いつきり広げて、手が届いたところまでが僕の世界で、そこにいたのが武満流知留^{たけみつるちる}だった。

「それ、なんて曲なの」

僕はプログラムに記述されていた通りにそう問いかけた。

「——『Self Portrait』」

彼女も、おそらくは僕と同じように、あらかじめ予定されていた言葉^{言葉}を小さな唇でなぞった。

これが僕たちの出会いだ。

流知留は夕暮れに染まる音楽室で、一人でピアノを弾いていた。

セルフポートレイト。自画像。

彼女がそう名前をつけた旋律はあまりにも——

これが彼女自身を映した旋律だというのなら、それはあまりにも悲愴で、胸が締め付けられた。彼女をそこから救いたいと思ったのは、僕のプログラムだったのか、それとも僕自身だったのか。

それから、僕たちは一年に渡ってその音楽室で心を通わせた。

——そして僕は今、〈世界の始まり〉の中で、変わり果てたその場所にもう一度辿り着くまでを追憶している。



【プログラム派遣会社アダム三原則】

第一条 デバッグプログラムは相手プログラムに恋愛感情またはそれに相当する感情を抱いてはならない

第二条 デバッグプログラムは作業中に規定されていない行動を起こしてはならない

第三条 デバッグプログラムは規定されていない台詞を発してはならない

事務所のあちこちに貼られた三原則の標語が、僕の喪失感をより強固なものにした。

全てが僕とは関係の無い言葉になり下がってしまったその文面は、あまりに空虚だった。

僕は美少女ゲーム、いわゆるギャルゲーのテストプレイ用に開発されたコンピュータプログラムだ。

主人公になり代わり、制作途中の女の子のプログラムに異常が無い
かチェックし、エラーがあった場合それを修正するのが僕の仕事——
だった。昨日までは。

エリア〈Prophet-5〉の片隅に「じんまりと屹立する漆ビルディング。その五階にある小さな事務所のさらに奥、ベニヤ板とうず高く積まれた段ボールに周囲を覆われ、外界から隔絶されたスペースで、僕と葉鍵アリス女史の密談は行われていた。

僕の右手は小さな両手で包まれていた。

それは酷く乾いていて、体温が感じられなかった。

もつとも、この世界では少しでも〈メモリ〉容量を空けるために、体温という情報は元から設定されていないのだけだ。

「あなたが赴任してきて最初の頃は、お世辞にも素行のいい部下とは言えなかったわね。ほら、なんて言ったかしら。最初に担当した子髪が銀色で、ピアノが好きで——」

「流知留ですか」

「あら、即答ね。まだあの子の方が好きなの？」

答える必要はないと思った。

それよりも僕は、彼女の腕時計の針音がさつきからあまりに規則正

しくて（規則正しくない時計は使い物にならないのだけだ）、それがやけに耳ざわりで妙な苛立ちを覚えていた。

僕はアリス女史の後ろの段ボールの山をほうと見ている。

無数の立方体、長方形が大小の区別なく不気味なくらいカチツと整頓され積み上げられたその光景は、一切のブレ無く進んでいくこの世界の象徴のようだ。

もしこの段ボールのうちどれかを引き抜いたとしても、ジェンガのように崩れたりはしないだろう。

きつと何事もなかったかのように、また段ボールの山は秩序立って整列を続けるはずだ。

——何かに使うかもしれないから

それがアリス女史の、段ボールを断固として捨てようとしな根拠だった。

でも僕は何年間もここに通っていたけれど、段ボールが有効活用されたところは未だに見たことが無い。

「まあいいわ。登録抹消の手続きがあるからちよつと待っててちょうだい」

どうやら僕は、段ボールよりも先にお片づけされてしまったようだ。

そんな宣告を下されてなお、僕は葉鍵アリスなんて酷い名前だなあとか今更なことをほんやり考えたりしている。

あらゆるものが輪郭を得ずに、窓の外の酷くミニマルなドラムンベースみたいな雨音にぶちぶちと風潰しに溶かされていく。頭と体が、空想と現実が遊離している。

いつの間にかアリス女史の手が僕から離れたことになって気付けな

い。

それはアリス女史の手があまりに体温を感じさせなかったからだけでは。僕がその手を握り返していなかったからだ。

僕は携帯情報端末を開いて、アダムの社員専用サイトへパスワードを入力しアクセスした。

僕の後任者の顔をいっぺん拝んでやろうと思った。

トップページにはでかでかとアリス女史の顔写真とプロフィールが記載されている。

〈**葉鍵アリス**。女性。日本製。アダムの指揮系統をつかさどるメインプログラム。在任年数五年八カ月——〉

冷血無比、巨乳、大酒飲み、ヘビースモーカー、と付け加えてやろうかと思った。

四年近く共に働いてきた僕から見れば、アリス女史という人物を語るにはこの簡素なプロフィールではあまりに不十分すぎる。

次にデバッグプログラムへのリンクをクリックし、サイトにアクセスした。

昨日までそこにあった僕のプロフィールは抹消されていた。

代わりに、一人の冴えない男（僕が言えた筋合いではないが）が冴えない表情でそこに掲載されている。

プログラムネームは東風。^{トシワカ}男性。中国製。

数年前に比べると、こここのところ日本以外のアジア圏で開発された

プログラムがずいぶんと幅を利かせている。もともと、（エウロパ）では言語が統一されているため、開発国という概念は僕らにとつてはあまり意味をなさないのだが。

（エウロパ）——この世界はそう呼ばれている。

かつて、僕たちは世界を持たなかった。それどころか、明確な意思すら持っていなかった。

だが人間は僕たちを、そして僕たちの空間を地球^{テラフォーミング}化した。

そうして僕たちが人間同様の思考と社会性を手に入れたことで、人間の世界ではソースコードの概念が失われ、代わりに僕たちプログラムとは直接スカイプやチャット、コミュニティサイトで意思疎通を図り、共にソフトウェアを構築していくという作業形式に変容した。

そしてその世界から今夜、僕が消える。

まるでこの東風という男と入れ替わるようにして。

目の前の段ボールの山から一箱引き抜いて、同じ大きさの別の箱をまたそこに突っ込んでみても全体の均衡は何も変わらないように、僕のいなくなつた（エウロパ）も今と何も変わらない世界なのだろう。

ブックマークを辿って画面表示をコミュニティサイトに切り替えた。

その短い作業時間だけで、東風のあまりに冴えない顔はもう思い出せなくなつてしまった。

もともと、僕の中のデータベースには視覚情報が記録されたはずだから、呼び出そうと思えばいつでもあの男の顔を脳裏に浮かべせることはできる。

けれど、もう一生邂逅することが無いであろう男の顔をわざわざ再び嘸み締める必要もあるまい。

僕は自分のトップページから、僕の開発者サカモトのトップページへ移動した。

別れの言葉を告げるためだ。

▼昼メシなう 12:40:33

▼昼メシなう 12:50:33

▼便所なう 13:00:33

▼仕事再開なう 13:10:33

サカモトのトップページには、十分おきに彼の行動が記録されたタイムラインが表示されている。

これはサカモト自身が記述したものではない。

彼の意思とは無関係に、自動的に〈ran〉と呼ばれる彼の肉体に埋め込まれたナノマシンが、彼の現在状況を逐一サイト上にアップしてくれるのだ。

プログラムが人間に近づいたように、人間も僕たちに接近してきている。

このライフストーリーミングと呼ばれる機能をサカモトはいつでもオンにしている。今はあいにく仕事中だった。

簡単な別離の言葉と形式的な謝辞で締めくくった短いメールを送ると、僕はそのサイトを後にした。

「さようなら」は本心だが、「僕を作ってくれてありがとう」は偽りの言葉だ。

僕はこの世界にはいけないプログラムだったからだ。

「どうして作ったんだ」。本当はそう書きたかった。

ふと――携帯情報端末の周囲が白い何かに覆われているのに気付いた。

それは、僕の右手だった。

僕の右手が、指先からじわじわと真っ白に染まっていく。

見ると左手も同じように白に蝕まれていき、それは次第に腕へ、さらに肩へ、首へ、顔へ、頭へ侵食していった。

足元も同様だ。靴の先から体の中心部へと、みるみるうちに白が侵していく。

「登録抹消手続きが終了したわ、〈ブランク〉」

アリス女史はもう僕のことを以前のように名前では呼ばず、ブランク、

すなわち空と呼んだ。

〈ブランク〉になった僕の体は情報を失い、全身真っ白のシルエツトに様変わりした。

僕らの顔も体も装飾品も、全ては情報の集積にすぎない。

分かっただけだが、こうして全てを失ってみると、あらためて僕という存在がいかに虚構そのものだったかを思い知らされたような気分になる。

「ご苦勞様、〈ブランク〉」

「お達者で」

最後に交わした言葉は、ずいぶんあつけないものだった。

外に面したビルの階段を降りながら、表通りを眺める。目を輝かせて東奔西走するプログラムたちに混じって、数人の〈ブランク〉たちが亡霊のように交差点を行きかっている。

亡霊たちはただひたすらに〈神〉の到来を待っているのだ。

日付が変わる瞬間この世界に突如として現れ、不必要になった〈ブランク〉をことごとく抹消していく〈神〉を。

いつものように、今日も雨が世界を叩いていた。

人間の世界には、雨が降らない日が存在するという。いや、雨が降る日が存在する、と言うべきか。

前述したように地球化と名付けられたこの一大変革だが、それはどうも適切な表現でないように僕には思える。

〈エウロパ〉には人間世界には存在しない概念、〈メモリ〉がある。一言でいえば、〈エウロパ〉内部に詰め込める情報の上限が存在するというところで、その制約によって〈エウロパ〉には時に人間世界に在るべきものが無く、無いはずのものが在る。

例えば、〈エウロパ〉の雨は止むことが無い。

熱による負荷を抑制するため、世界を一定に冷却する必要があるからだ。

だが、僕らはその雨を冷たいと感じることができない。

そういった感覚が僕らの中であらかじめ欠如しているのも、〈メモリ〉維持のための工夫の一つだった。

〈エウロパ〉の雨には何も無い。一時の涼をもたらす爽やかさも、湿気を招き入れる不快さも。

永遠に一定の降水量を保ちながら降り続ける、ひたすらに叙事的な

雨

階段を下り切った僕は、その雨に向かって、亡霊たちの葬列に向かって、一步を踏み出した。

〈神〉の目覚めを待つのにちょうどいい雨宿り先を見つけるための、あてもない流浪へと踏み出す、絶望の一步を。

外に出ると、雨は無感情に僕を叩いてきた。

僕は流浪の民らの進む方向にそのままついていくことにした。

現役プログラムと僕ら〈ブランク〉とは、まるで別世界に生きているように互いに目を合わせようとはしない。

いつの間にか出来上がっていた暗黙の了解のようなものだが、〈ブランク〉の立場から見ただけはいささか戦慄を覚える情景であった。

事務所ではあんなに実感が湧かなかったというのに、ここにきて昨日までのコミュニティからふっと弾かれてしまったことをようやく知覚することができた。

——怖い。

あまりに原始的な感情に、僕は急速に蝕まれていく。

極度の慄然で体が痙攣上がり、嘔吐感に苛まれる。

僕は心の瓦解をなんとか食い止めようと、何かさがることのできるものを必死に探そうとした。

その時、僕の心の中にふと顔を覗かせたのは流知留だった。

◇

——追想

放課後、音楽室からはいつものようにピアノの音色が聞こえてきた。僕はシナリオ通り、そこに入る前に、しばらく扉に寄りかかって廊下でその旋律に耳を預けた。

僕は一人の世界に入り込んでいる時の流知留が好きだ。

誰に聞かせるでもなく、流知留自身が自分の世界に届けるために生み出すメロディが好きだ。

聞いていると、普段感情を表に出さない流知留の内面に触れることができるような気がする。

そしてそのメロディは、最初に聞いたあの日から確実に変わってきている。

僕と出会ったから、なんていうのは自惚れなのかもしれないけど、流知留の心が日を増して明るく照らされているのは明らかだった。

ふいに演奏が止まった。

それから少しの間をおいて、僕の背中に面していた空間がガラッと音を立ててスライドした。

「おわっ！」

突然体を預けるものを失った僕は、なすすべも無くその場に仰向けに転倒した。

「盗み聞き禁止」

流知留の、高いが細かい声が空から聞こえた。

……痛い。ゲームの中では、(エウロパ)には存在しない痛覚がしっかり機能するのだ。

思いつきり背中を硬い木張りの床に打ちつけたが——目を開けた瞬間飛びこんできたカラフルな布を見るにつけ、僕の現金な体は急速に回復した。

「ピンクの水玉かあ」

「ぐっっ！」

流知留は慌ててスカートを両手で押さえた。

その風圧で運ばれてきた甘酸っぱい匂いが、僕の鼻先をくすぐる。

これは言い訳でもなんでもなく、スカートを穿いた女の子の真下に仰向けで寝転んでいる格好なのだから、このハプニングを不可抗力と言わずしてなんと言おうってやめてください踏まないでおうふっ！

げしゅ、げしゅ

げしゅ、げしゅ

「あもう、流知留さん……？」

げしゅ、げしゅ

「もしかして、怒ってます……？」

げしゅ、げしゅ

「……ごめんなさい」

げしゅ——

流知留の踏みつけラッシュ攻撃はようやくそこでストップした。

とは言っても、こういう時流知留はちゃんと上履きを脱いで踏んでくるし、非力なのか手加減してくれているのか分からないが全然痛くない。

むしろ顔には出さなければ、僕とこのうった戯れを楽しんでいる節すらある。

初めて会った頃の、誰に対しても無関心だった流知留からは考えられない変化だった。

流知留は、色素の薄い銀色の腰までかかる髪を整えながら言った。

「見えたからって、口に出さなくていい……」

あー。そこかあー。

言うなり、流知留はふいっと顔をそむけた。僕はそのあくまで無表情の横顔を見て、長いまつげにうつとりした。

音楽室に差し込む夕焼けの強烈な色味に負けて、少し黄色みがかって見える銀髪のなびく様が儂げだった。

「そういや、さっきの曲ってなんて曲だ？ 今まで聞いたどれとも違う」

「しんきょく」

「マジで？ タイトルは？」

『Self Portrait』

「それ前弾いてたやつじゃん」

「ちがうよ」

「最初に会った日に聞いたのと同じだ」

「同じだけど、ちがうの」

「パート2みたいなの？」

「ちがうの。同じなの」

「べつちなの」

『Self Portrait』は『Self Portrait』なの

……そういってさっさと。

僕の理解力が乏しいからなのか、はたまた流知留が感性の塊みたい

な子だからなのか、たまに会話がこうして嘯みあわなくなる時がある。でも、そんなディスコミュニケーションすら僕にとっては愛おしい時間だ。

「それ、いつ頃完成しそう？」

「卒業式までには、ぜんぶ作る」

「じゃあ、式が終わった後、ここへ聴きに来ていいか？」

流知留は、こくと小さく頷いた。

と、一瞬の間ができたかと思うと、今度は激しく首を横にブンブンと振り乱した。

前言撤回、もとい、前こくん撤回ということらしい。

「……盗み聞きして」



流浪の民は、いつの間にかエリア (Family Computer) まで足を踏み入れていた。

(エウロパ) の区画は、かつて人間世界で大きな貢献をしたプログラムの名を冠している。

(Family Computer) は一時代を築いた日本のゲーム機の名前から、湊ビルディングのあった (Prophet-5) は電子音楽に革命をもたらしたアメリカ製アナログシンセサイザーの名前から付けられた。

流知留の思い出に浸りながら歩いていたら、ずいぶん遠い区画ま

で来てしまった。

その分、気持ちの面ではだいぶ落ち着きを取り戻せたような気がする。

そう、全てを諦めるということは、落ち着くということに他ならない。

——武満流知留。

僕がはじめて担当したゲームのキャラクター——いや、キャラクターというのは人間から見た場合の形容だ。僕らにとっては、とあるゲームで女を形どっていたプログラムと呼ぶべきかもしれない。

恋をしたのだ。

シナリオに沿った恋ではない。

デバッグプログラムにとって禁忌である本当の恋心を、僕は流知留に抱いていた。

そして、その抑えようのない情動は彼女のバグの発見によってあまりにあっけない幕切れを迎えた。僕が見つけたのだ。

その後、シナリオ変更によって彼女はゲームの中に登場しないことが決定し、バグを抱えたままソフトウェアのサーバーの片隅に放置された。

あれから幾年もの月日が流れた。

もう流知留も、音楽室も、ピアノも、彼女の音楽も、きつと抹消されている可能性が高い。

もつとも、アダムで働いている期間、それを確認するためのチャンスはいくらでもあった。

各メーカーの広大無辺なサーバー内は、アダムに在籍している限り

ほとんど立ち入り自由だった。

けれど、僕は怖かったのだ。

流知留がバグに犯されたのは僕のせいだ。

卒業式直前までシナリオを進めなければ、流知留はバグらなくて済んだ。

僕が流知留を好きにならなければ、流知留はバグることはなかった。

僕がはじめから別の女の子のルートに進んでいれば、流知留にはバグが発生しないまま、静かにサーバーの中で一生を終えることができずに違いないのだ。

彼女の世界を奪ったのは、僕だ。

さつきまで、自身の抹消を全身が竦み上がるほど恐怖していたのが

愚かしい。

当然の報いじゃないか。

こんなことなら悠長に〈神〉がやってくるのを待ってなんかいないで、さつきと自分で命を絶つべきだ。

——そう一瞬思考したが、残念ながらそれはこの世界では叶わぬ望みである。

僕らは常にバックアップがとられ、例え〈エウロパ〉の中で消滅してもすぐまた再構成される。

だからこの世界では自殺も殺人事件も起こらない。起こりようがない。

バックアップもろとも抹消は、〈神〉のみが所持している唯一絶対の権限だ。

どちらにしろ僕には、アダムを除籍されてゲームのサーバーに立ち

入ることが不可能になった今、流知留ともう一度会える一筋の可能性すら立ち消えている。

この期に及んで邂逅を望んでも、それは叶わない。

——僕は、流知留に会いたいのか？

その答えは、もちろん決まっている。

けれど、もう——

「せ——————んば——————いッ！」

突然の大声に、僕は思わず顔を上げた。

数十メートルほど向こうで、傘を差した少女を形どったプログラム

が、先輩とやらを呼びとめていた。

深いスリットの白いチャイナドレスを着ていて、耳元では青いライ

ンの入ったヘッドホンが空中に浮遊している。

どうやら相手に気付いてもらえないらしく、何度も手を振ったりび

よんびよん跳ねたりしている。

「せんばいつてば——————！」

その先輩はよほど鈍感なのか耳が悪いのかそもそも彼女だけに見える

の幻かなにかなのか、少女の健気な絶叫は一向に止まらない。

痺れを切らした少女はこちらの方へ向かって駆け出してきた。

緑色のウェーブがかかったショートボブが、彼女の体の揺れに合わせ

てぼよんぼよんと弾む。

僕との距離が縮まると、だいぶ背が小さいことが分かった。

目測で、百四十センチ半ばと言ったところだろうか。

どうやら先輩というのは僕の周辺にいる人物らしい。

辺りを見回すと、他のプログラムたちは少女に目もくれず忙しげに

大通りを通りすぎていく。

先輩とやらが気付いてくれるといいな。僕は心の中でそう呟いて、

視線を前へと戻した——その眼前に、明らかに僕に対して視線を向け

ている少女の姿が映った。

「先輩、はじめましてです！」

ぺこり、と少女は僕に向かっておじぎをした。

だが、僕はこの少女に全く見覚えが無い。

それに……彼女のような若いプログラムが《ブランク》と関わって

はいけない。

それはこの世界の鉄則だ。

僕は彼女の言葉を見逃して横をすり抜けその場から立ち去ろうとし

たが、少女はその隙を見逃さず僕の真つ白な左腕をがっしと掴んだ。

周囲はプログラムと《ブランク》のあらゆる交流にどよめいている。

この少女には世間体というものが無いのか。

亡霊と現役プログラムとの間では、会話をすることはおろか目を合

わすことすらタブー視されているというのに。

「先輩、ボクのこと分かりませんか？ 分かりませんか？ 当ててく

ださい！ データベースから照合すれば出てくるはずですよ！」

僕は元来、他者とあまり関わりを持ちたがらない性分だ。ゆえにデー

ータベースに登録されている個体プログラムはさほど多くない。

こんな馴れ馴れしい少女と面識があったとしたら、照合するまでも

無く思い出せるはずだ。

タチの悪いはずらか。いや、僕と一緒にいて社会的な立場を危う

くするのは彼女のほうだ。僕にはデメリットは無い。

「はやく〜」

この場から立ち去るべきかどうか逡巡しながらも、結局僕は彼女の言葉通りに照合を始めた。

目から入ってくる視覚情報と、左腕に触れている彼女の両手から伝わってくる情報を解析し、データベース上を検索していく。

「お〜そ〜い〜」

「うるさい、今やつてる」

「ふああああ、ふああふひへふららあーい」

少女は大あくびをして僕を急かした。そんなに早く終わるか！

——いや、あの距離から僕を即座に認識した彼女だ。適当なハッターでからかわれているのでもなければ、この少女は僕なんか足元にも

及ばないほどのハイスペックだ。

おそらく彼女の基準から見れば、僕はあまりに、遅い。淘汰されるべき存在。

「がーんばれ、せーんばい！ ハイがーんばれ、せーんばーい！」

少女はパンパンとリズムカルに手拍子で調子をとっている。

「もう少しだ。——出た、これか！」

【プログラムネーム・東風】トシフウ【所属・プログラム派遣会社アダム】

【制作国・中国】【性別・女】

僕は自分の網膜に転送され映しだされたデータを見て愕然とした。

そして、合点がいった。

なるほど。先輩、ね。

性別が変わっていることに関しては、別段（エウロバ）では驚くべ

き〜ことでもない。

僕たちプログラムはいつでも何度でも、外見プログラムを設定し直すことができる。

自由に異なる性別、異なる顔、異なる服装を楽しむ行為は（エウロバ）では一般的な娯楽の一つとして認知されていることだ。

僕自身も、一度だけ設定変更を行ったことがある。

それよりも、ある一つの事実気付いた時、僕は人間の世界でいうところの神という概念の存在を信じずには居られなくなった。

そう、この東風は、僕からゲームサーバーへのアクセス権限を委譲されたプログラムなのだ。

これは、僕に残された最後の藁だ。

しかし——僕にそれを掴む資格があるのだろうか。

「うふ、そうですね、いかにも東風です♪ アダムのプロフィール画像と全然違ってびっくりしましたでしょ！？ 今日のコンセプトは

近未来風チャイナ娘で仕上げました！ 昨日はロンドン風相撲取りで、

一昨日は広島風ジャンヌダルクで、その前は——」

だんだんご当地グルメみたいな名称になっていくコンセプトはとも

かく、これだけ毎日自分の姿を変える物好きを僕ははじめて見た。

そんなことを続けていたら、自分を、見失わないのだろうか。

いや、そもそも僕たちに見失うべき自分という存在があるのだろうか。

か。

「ね、ね、ところでどうして先輩のプログラムネームが検出できないんでしょうね？ もしかしてボクバグっちゃったとか！？ うがー！

どうしようどうしよう、一大事ですよお先輩！」

「僕の名前が検出できないのは、僕が〈ブランク〉だからだよ」

それだけじゃない。僕は流知留がバグを抱えてサーバー上に放置されたあの日から、設定されていたプログラムネームを捨てたのだ。

代わりに僕は、自分の顔をゲームの主人公の顔に移し替え、主人公と同じ名前を名乗るようになった。

その姿で生き続けることこそが、罪を背負うことなのだと思うたから。

僕たちは何にでもなれる。この東風のように。

でもそれは同時に、何にもなれないということも意味する。

だから僕は、流知留の相手役に成り代わったまま、他の何にもなろうともせずに一生を終えることを選んだ。

けれど、それだけでは結局のところ、単なる自己満足に過ぎないのではないか。

一人で罪を背負う覚悟の先にあるものは一体何なのだ。

僕は何者だ。

それは罪人の名前では決して無い。

僕は何者だ。

僕は、ギャルゲーの主人公だ。

僕は、流知留にとっての主人公だ——

「東風、僕の最初で最後の頼みだ。聞いてくれないか」



——追想

放課後。いつも通りの音楽室。

いつも通りに見えて、少しずつ変わっていく流知留の音。

僕はピアノを弾く彼女の後ろに立って、黙って演奏を聴いている。

その後、他愛もない会話を二、三交わすだけで今日のイベントは終了する。

流知留シナリオは味気ないイベントが多い。なにせ音楽室以外で発するイベントなんて数えるほどしかないのだ。

それはそれで、流知留らしい。

そして今日も僕はいつも通り、主人公を演じ切って終わる——はずだった。

それはふとした衝動だった。

僕自身、自分の犯した過ちに気付くまで少し時間がかかった。

僕の手が、流知留の腰まで伸びた艶やかな銀色の髪を、あるうにか……撫でていたのだ。

それはシナリオに沿った行動ではない。主人公ではなく、僕自身が流知留の後ろ姿に見惚れるあまり、半ば無意識的に犯してしまった失態だ。

しまった……と思った時にはもう遅かった。

瞬間、いつもはピアノの旋律しか響かない音楽室に耳をつんざくような警報音が氾濫した。

〈規約違反発生、規約違反発生、テストプレイヤーヲ、緊急転送シマ

ス>

緊急事態を告げるアナウンスが鳴り響くと同時に、僕の視界は急速に薄れていった。

けたたましいサイレンの中でも、流知留はピアノを弾き続けていた。その場から消え失せていく僕に彼女が注意を向けることは決して無い。

流知留は、あくまでプログラミングされた通りの行動を行っているだけだからだ。

それでも、彼女の銀色の髪を撫でた瞬間、ほんの一瞬だけ、流知留は演奏をミスした。

何度もここで聞いた曲だ。ミスタツチくらい僕でも気付く。

遠ざかる意識の中で、僕は流知留がプログラム通りの演奏ができなかった理由を推測した。

もしかしたら、あれは流知留の——「動揺」、だったのだろうか。

余談だが、事務所に緊急転送された後、アリス女史にこつ酷く叱責をくらったの言うまでもない。

◇

〈次の曲がり角を右です、先輩〉

「大丈夫、このサーバーに関しては僕のほうが熟知してる。クラッキ

ングしてくれたのはありがたいけど、ナビゲートはいらないよ」

東風は僕の願いをあっさり聞き入れてくれた。

東風は僕と共に、深夜の湊ビルディングに忍び込み、ギャルゲーサーバーに入り込むと僕が侵入できるようにデータを改竄した。

当たり前だが、犯罪だ。

東風にとって今夜は、初出勤日前日にあたる。

そんな前途有望な若者にこんな恐ろしいクラッキング行為をさせてしまった僕は、なんと罪深い男なのだろう。

また背負うべき罪が増えてしまったような気がする……

〈なにうな垂れちやつてるですか先輩！好きな女の子に久しぶりに会うんですから、もつとしゃきつとしなさい！ネクタイ曲がつてませんかー？〉

「なあ、東風」

〈はいはいー！〉

事の重大さを自覚しているんだかないんだか、全く悪びれもしない様子で東風は応答した。

「今更こんなこと聞くのもあれなんだけども、本当に良かったのか。なんだったら今すぐ引き返して改竄した部分を全て元通りにすれば、

君は何事も無く今後も職務に従事できる。だけど、もしこの行為が誰かに嗅ぎつかれたりでもしたら、君は即刻抹消処分になることだって十分考えられるんだぞ」

〈うがー……〉

携帯情報端末のモニター越しに、東風は人差し指をぶくつとした唇に押しあてて思案するような素振りを見せた。

「ボクってちょっと頭良すぎる傾向あるじゃないですか」

いや、知らんよ。

「どうしてプログラムの役目が終わった人達とお話しちゃいけないのかとか、考えても考えてもぜんぜん答えが出なくて、でもそういうことが暗黙の了解とかいう訳の分かんない言葉で正当化されちゃってるのが今の世の中って感じがして、こんな世界なら滅びちゃえーって思ってたつもりですけど、でもそんな中で先輩と流知留さんの話を聞いて思ったんですよ。この渴ききった世界を救うのは、他でもない愛だと！」

「……」

「愛だと！」

なぜ強調した。

「そのためなら自分はどうなってもいいと」

「ボクって結構自分に対してドライなんですよ」

「そんな感じはするよ」

愛……ね。

それで世界が救えるのかどうかは知らないが、少なくとも僕は、流知留を救いたい。

僕は記憶を頼りに、足繁く通いつめた音楽室のある空間へ向かった。何年も昔のことだと言うのに、まるで帰巢本能で自分の在るべき場所へ帰っていく伝書鳩のように、一切の迷いも無く僕はそこにダイブしていった。

——そしてその場所に、僕は確かに辿りついた。

そこは森閑とした——闇だった。

そこには何も無かった。

音楽室も、夕陽も、ピアノも、流知留の音楽も。僕と流知留を繋ぐものは、もう何も残っていなかった。

僕は膝から崩れ落ちた。

しばらく、僕はその静寂の中で何も考えられなかった。

ただひたすらに、ごめん、ごめんと心の中で唱え続けていたような気がする。

あまりにも、あまりにも、遅かったのだ。

お喋りな東風も、この時ばかりは何も話しかけてはこなかった。

「——付き合ってくれてありがとう、東風。今からそっちに戻るよ」

モニターに映る東風は、ただ俯いていた。さつきは僕にうな垂れるなって言いたくせに。

緑色の髪に隠れてよく目元が見えないが、おそらくは泣いているようだった。肩が上下に不規則に動いている。

と、突然東風の動きがピタリと止まった。

「待って、ください……待ってください——」

東風は叫んだ。

「まだ望みは消えていません！ キャッシュユです！ キャッシュユメモリが残っていれば——」

キャッシュユメモリ——データを複製し保管しておくポイントのことをそう呼ぶ。

例えば閉鎖されたウェブサイトも、キャッシュユさえ残っていればそこから閲覧することができる。

「……探せるのか」

（探します、なんとしても！ ころなりや意地ですー）

東風が検索を開始すると、途端辺り一面から強烈なグリッチ・ノイズが響き渡った。

ブチブチ、チリチリと、耳を焼き焦がすような異常パルスの波が絶え間なく押し寄せてくる。

前衛的なクリックハウスやエレクトロニカを聞いているような、微細なざわめきの饗宴。

周辺の空間が、何か物言いたげにざらざらと呟く音響に支配されていく。

このノイズの中に、流知留の断片が埋もれているかもしれないと思つて、僕はそれを聞き洩らさないように耳をそばだてた。

そこは居心地が良かった。

ノイズは次第に空間の色に、そして空間の形にまで侵食した。

どこまでも闇に覆われていた世界にいたはずの僕は、いつの間にか真つ白な長方形の箱の中にいた。

やがてノイズは散開し、収束した。

その箱の形、大きさは、まるで音楽室のようだった。

だが、そこにピアノは無い。木張りの床も、音楽家の肖像画も、放課後の音楽室を染めていた夕暮れも見当たらない。

この空間にわずかに残留していた記憶——キャッシュニュー——が蘇らせることができたのは、この真つ白な音楽室だけだった。

流知留も、そこにはいない——

白一色の、静謐な世界。

ふと——何かが僕の手にとつと触れたような気がした。

僕は両方の手のひらを胸元のあたりで上へ向けた。

また、熱を持った何かがちよこんとそこに触れる。

何も見えない。

何も見えないのに……どうしてだろう。

それが流知留の指先の温もりであることを、僕は知っている。

流知留が今、ここにいることが僕には分かる。

もう一度、流知留の指が僕の手のひらを叩いた。

今度は一回きりではなく、連続して十本の指を繊細に操り、僕の手のひらをさらさらと撫でていく。

ああ、そうか——

流知留は、ピアノを弾いているのだ。

僕の手のひらは、懸命に彼女の指の温もりを追った。

流知留の音が、一音でもこぼれてしまわないように。

流知留の指先に触れるたびに温もりが手のひらに伝わり、それが渦をまいて体中を駆け巡っていく。

温もり。

それは、（エウロペ）で抑制されていた情報。

温もりとはこれほどまでに、心の中を叙情で溢れさせるのだ。

僕は聴いた。

流知留の奏でる無音を。

十二平均律の彼方で響く、幽玄な旋律を。

そして、流知留そのものを。

流知留は、あの日廊下で聞いた『Self Portrait』を弾いていた。

流知留は、あの日廊下で聞いた『Self Portrait』を弾いていた。

僕らが出会った目の悲しげな自画像は、もうそこには無かった。
新しい自画像は、流知留が持つていたとしても拭い切れない生来の弱さを隠そうとはしていない。

でも、そこに確かな淡い光が差し込んでいる。

それは僕たちが過ぎ去った時間そのものだ。

流知留の自画像の中には、確かに僕が書き加えられていた。

——その時、世界が音を立てて震えだした。

光が溢れかえり、熱が僕たちを包んだ。

サーバーが、(エウロバ)が、足元から空まで少しずつ瓦解していく。

まやかしの空がひび割れ、雨が止んでいくのが見えた。

そして僕たちは、せきを切ったように溢れだした濁流のような音の

洪水に押し流された。

——流知留の音が響き続ける世界に行くのだ。

僕は目を閉じて、ただそれに身をゆだねた。



結局、拙者たちの世界は何も変わらなかった。

(エウロバ)は崩壊した瞬間にバックアップにより再構成され、何事も無かったように安定と退屈な世界に戻って参った。

崩壊の原因は現在調査中であるとのことだが、拙者には大体見当がついておる。

あの真つ白な音楽室に溢れかえった音と温もりの情報があまりに大きすぎて、(エウロバ)は(メモリ)の許容量をオーバーし一度消滅したのであろう。

だがそのまげたき一つで見逃してしまいそうな消滅の瞬間、新しい世界が生まれたことを、(世界の始まり)が訪れたことを、拙者はモニター越しに確かに見ていた。

愛は世界を救わなかったが、代わりに世界をまるごと一つ作りあげてしまったのだ。

そちらのほうがよほど凄いかもしれぬと、拙者は思う。

再構成された(エウロバ)には、以前とは一つだけ異なる点がござった。先輩の不在である。

先輩は(世界のはじまり)へ向かったのだ。流知留さんと共に。

「東風、ボケつとしてないで仕事仕事——って、今日もまた凄い格好ね……コンセプトは、さしずめヒッピー風侍ってところ？」

「これはこれは葉鍵アリス殿！ いえ、今日は吟遊詩人風侍でござる」
「……どっちでもいいけど、いくらプログラムとは言え、こつも毎日のように服装も性別もキャラも変えて来られると調子が狂うわね……
どれが本当のあなたなのかしら」

それは、拙者が一番知りたいことではないか。

「それにしても常々思っておったが、葉鍵殿の名前はまるでエログーマーカーの寄せ集めみたいでござるなあ」

「……あなた、齒に衣着せぬところだけはいつでも変わらないわね……」

ほう、なるほど。

また一つ、拙者は拙者のことを知っていく。

木星の第二衛星エウロパは、分厚い氷に覆われた真つ暗な深海に、生命の存在している可能性が指摘される星だ。

その名を冠した（エウロパ）も、まるで深海のような世界だ。

異形の生命体が、分厚い雨雲の下、決して長くない命を燃やして生きていく、そんな世界。

拙者は知りたい。

拙者は一体何者であるかを。

故に拙者はあらゆるものに変化していくのだ。

最近では、音楽をよく聞くようになった。

月

ある日のこと、私は大変なことに気付いてしまった。

それはそれは私の命に関わる大きなことだ。

巢のへりに立って下を覗き込むと、足がすくみ体が震える。

「どうしたんだ？　なんか気分悪そうだな」

兄弟が私の顔を覗き込む。

「……いや、別に何もないさ」

言いながら、口も震えていた。

「だったらいいけど……すごい震えてるし……」

「大丈夫だから。気にしなくていい」

「……そっか」

訝しげにしながらも兄弟は黙って私から視線を外した。

それでいいのだ。心配されたからといって、本当のことなんて恥ずかしくて言えるはずがない。高いところが怖いだなんて、実は高所恐怖症だなんて、どうしてそんなことが言えるだろう？

「おっ、帰ってきたぞ」

母が今日の飯を持って帰ってきた。ここから見る限りあれはミンミズかなんかの肉だろう。

兄弟たちがみんなで我先にと頭を伸ばしている。だが私にはできるはずがない。なぜ父と母はこんなにも高い木の上に巣をつくったのだろうか？　兄弟たちのように乗り出したら落ちてしまいそうだな。

「もう一回行ってくるからいい子で待ってなさいよ」

そうやって黙っているうちに今の飯はすべてなくなってしまった。母はもう一度飛び立っていった。

しばらくして母は帰ってきたが、やっぱり私はほとんどありつけなかった。そんなコンプレックスを抱えたまま日々は流れた。

このせいで私の体はいつまでも大きくならず、兄弟の中で最も小さかった。しかもその差は一回りや二回りどころではなかった。

「さて、そろそろ自分で飛んでもいい頃かね」

母が言った。飛ぶ？　冗談はやめてもらいたいものだ。

「どうやって飛ぶの？」

兄弟たちは無邪気にそんなことを訊いている。

「背中の羽を広げて風を抱くようにすれば飛べるわ。やってみなさい」
言われてすぐに兄弟たちは羽をばたつかせ始めた。目が輝いている。

「あんたもやってみなさい」

優しい口調に私の心は痛んだ。

「ちよつと……」

「ん？」

「ちよつと調子が悪いから明日やりますよ」

とはいえ怖いものは怖い。想像するだけでもぞつとしてしまうのだ。口に出せないのがつらかった。

「……そう」

なんとしてでもこの恐怖心をなくさなければ。

「できたできた」

空を舞う兄弟たちを見てそう思った。

そして夜が訪れた。みんな寝ている中、私は意を決して下を覗いてみた。

「——っ」

その先に広がっていたのは、どこまでも続いていそうな深い深い闇怖すぎる。ありえない。どうすればいいのだ？ 昼間のほうがまだましだ。昼間でもできるわけではないが、それでも覗き込んでいることさえできなさそうなのは、今よりはましだ。

絶望して私は空を仰ぎ見た。

「くすくすっ」

——月が、笑っていた。

「やあ坊や、ずいぶんと悩んでいるようだね」

やたらと高くて聞き取りづらい声。

「ああ、悩んでいるさ。誰に話すのも恥ずかしいような悩みだ。兄弟にも、母にも話すことはできない」

「だったら、僕に話してみたらどうだい？ 悩んでいる君と、ここで出会ったのはきつと何かの縁があつてのことだろう。それに僕は君よりも年をとっている。君のお母さんよりも、君のおじいさんが生まれるよりもずっと前から僕はこうして生きている。もしかしたら悩みを解決できる名案が思い浮かぶかもしれないよ」

「……聞いても笑ったりしないか？」

「保障はしないけれど、笑わないでほしいならがんばるよ」

このときになぜ悩みを打ち明ける気になったのか、それはきつと月のこのふざけたような態度に少なからず私が飲み込まれていたからな

のだろう。兄弟や母にも、とにかく誰にも言えなかったことを私は簡単に口にしてしまった。

「実は、空を飛ぶように母に言われたんだが、私は正直言つて高いところが怖い。空なんて想像しただけで震えが止まらなくなる。下を覗けば足がすくむ。兄弟たちはみんな練習を始めているし長い間ではないが飛んでいる。それなのに私だけは……」

「くすくすっ」

このやろう。

ムツとした目で月を見る。

「いやあ、ごめんごめん。でもそれはおもしろい話だね。空を飛ぶのを恐れる鳥がいるなんて聞いたことがない」

「笑わない努力はしたのか？」

「するつもりだったよ」

月は悪びれもせずと言った。

「でもまあ少し考えてごらん。坊やの背中には翼があるじゃないか。空を恐れて使わずにいたらもつたいたいと思わないかい？」

「そういう問題ではない。こんなものがあつたところで私の心が空を拒絶するのだから飛ぶことなどできない」

「ふうん、でも坊やみたいに全身が黒くて翼を持っている者たちは、みんな空を飛ぶことで敵から身を守り、自らの食を得るんじゃないのかい？ 飛べないとなると先は見えちゃつてる気がするけど。現に坊やはその巢の中で圧倒的に小さいじゃないか」

「……」

月の言うことは確かに正しかった。私たちの種族は空を飛べなければ

ば生きる術がないと言ってもいい。

「簡単なことじゃないか。その翼を大きく広げてごらんよ。風を抱くに十分な大きさがあるだろう？ みんなやっているじゃないか。空を恐れる必要なんてない。僕を見てごらん。翼なんて持つてないのに僕は空を飛んでいる。それも坊や、君の兄弟や君のお母さんでも到底届かないくらい高いところを。確かに、この高さから落ちたらなんてことを考えて震えないこともないさ。でも、それでも僕は飛んでいなければならぬんだ。坊やと同じように僕の種族も飛んでいなきゃならないから。それに、坊やの種族の中で空を飛べなかつた者を僕は知らないよ」

「……私でも、飛ぶことができるのか？」

「もちろんさ、坊やの背中には翼がある。何を恐れる必要があるんだい？ 飛べない理由がないじゃないか。翼がなくても飛べる僕がいるのに、なぜ持つている坊やが飛べないんだい？ そんなことありえないだろう？」

この言葉を、私は待つていたのかもしれない。私にもできる。それを誰かに教えてほしかったのかもしれない。

「……月よ、私もやつてみよう。その言葉には助けられた。礼を言う」

月は小さく笑った。

「そうかい。それがいい」

「これから空を舞う私の姿を、見ていてほしい」

月が頷いたのを確認して、私は巢のへりに立った。両翼を広げる。まだ足の震えがないわけではないが、心までは折れていない。

そして、一步を踏み出した。

広げた翼が風を抱く。

いい気分だ。

さあ。

——ドシャツ。

「……くすくすつ」

冷たい風が地上に吹き、秋の空は今、黒と白で構成されている。夜。人類にとつて最も脅威で、最も神秘的なもの。

月光が古い洋館を照らす。それは恐怖を煽るホラー的なものではなく、それは静かでも優しい光だった。

白い三日月に見守られて、二人の男が洋館でコンコンと話している。

「博士。ついにやりましたね」

「ああ。これは世界を大きく変えるぞ！」

博士と呼ばれた男は、眼鏡を曇らせながら興奮気味に続ける。

「だが、これはまだ未完成だ。まだまだ改善の必要がある。マウスなんかではなく……そうだな、人間の被験体が必要だ。助手君、どう思うかね？」

人間の被験体。要は人体実験のことだ。

「はい。それは探査者として純粹な動機だと思えます。しかし、博士。この実験はあくまで秘密裏に行われてきたものです。人間を使うなど……一体どうやって集めるつもりなのですか？」

助手のもつともな意見に、博士が鼻で笑った。

「ふん。こんなご時世だ。ちよつと高めの給料で求人にも載せれば、いくらでも人が来るだろう」

「なるほど、わかりました。では、さつそく求人会社に連絡を……」

「ああ、そうそう。とりあえず、業務内容は『美容モデル』とかその辺のを適当にチョイスしておいてくれたまえ」

——かくして、求人広告にひっそりと『美容薬品テストスタッフ』の文字が印字されたのであった。

古い洋館の形をした研究施設は、求人募集を見た人たちで賑わっていた。

昨日広告に掲載されたばかりにも関わらず、単に報酬がやたらと高ただけでここまで集まるとは……博士の思惑通りになって、助手は今の世の中が如何に世知辛いものであるかを実感した。

「博士。どうなさいますか？ 予定より多くの人々が集まりましたが……」

「ふむ。一人ずつ面談……などと面倒なことはしたくないな」

「しかし、より多くのデータが欲しいのも事実なのは？」

「確かに。だが、これはあくまで秘密裏に行われるものであって、大々的にするものではない。それに、被験者は二人もいれば事足りる」

「では、この中から素質のあるものを二人選んで、彼らと面接するというのがどうでしょうか？」

「なるほど、それはいい考えだ。なら、まず、あの化粧の濃い女性はダメだな。そういう奴はロクなもんじゃない。まあ、私の好みじゃないからだなんて口が裂けても言えないけどな」

「博士」

「……ナンデモナイヨ？」

「はあ」

この博士は今回の募集の意味をきちんと理解しているのかと、助手

が不安に駆られていると、博士がポンと手を打って助手に指示を出した。

「よし、決めたぞ助手君。あれと、それを採用しよう」

「了解しました」

「うむ。すぐに準備してくれ」

助手が応接室の準備をする。

「完了しました」

応接室は洋館の使っていない部屋に椅子と机を運び込んだだけ。掃除をされていない部屋は、少しほこりっぽい。

「随分と地味だな」

「私は便利屋じゃないですから……。そう全部はできません」

「え、違うの？」

「……」

冗談のセンスが悪い上司を持つと部下は苦労すると言う社会の鉄則は、科学の世界でも常識らしかった。

助手は溜息を一つ吐くと、博士を無視して指名者を呼びに行った。

「付き合いいいな」

博士はほやくと、応接室の備え付けソファードットかかりと腰を下ろす。最近の若い者は冗談に付き合える忍耐力が足りないな、などと思いつながら来訪者を待った。

「失礼します」

最初に入ってきたのは、やせ細った女性だった。

「よろしくお願いします」

二十代後半であろう女性は、灰色のスーツに身を包み、その様はまるで就職相談に来た苦勞人だ。

「まあ、かけたまえ」

博士は女性を上から下まで眺めてから、椅子を勧めた。

「ありがとうございます」

博士はコホンと咳払いをした後、女性を上から下まで眺めた。スラリと長い脚、くびれた腰、長く伸ばした髪は艶が出ている。つまり、ある程度美人の条件をクリアした女性であるが分かる。だが残念なこと、肉がないから肌に張りが無い。

「当然ながら胸もなかった……か」

「あ、あの……」

女性がおすおすと博士に声を掛ける。博士がそれに気付くと、慌てて言い訳をした。

「すまない。最近忙しくてね、ボーっとしてしまっただけ。それじゃ、早速だけどいくつか質問させてもらう。いいかね？」

「はい」

博士の必死の言いわけに気圧されたのか、女性が頷く。博士はこの流れを止める訳にはいかないとはい、質問を開始した。

「今、何か仕事をしているかね？」

「はい。図書館司書をしています」

「ほほう。無職ではないのか」

「ええ、一応」

博士は割と失礼な人だった。ちなみに、図書館司書とは、図書館利用者のアイドルのことである。

「いいね。うん。いいね」

博士くらいの年齢にもなると、何の用事もないのに、図書館にふらりとでかけて、秘書さんとしゃべって帰るなんてこともある。

「さて、次だ」

「はい」

「何故 これに応募したのかね？」

博士が求人広告をポンポンと叩く。

「はい。年齢制限もなく、資格・学歴も問わないという職務内容、さらには報酬前払いのことだったので……伺ったのです」

博士は報酬が高いだけだと人が来ないと思ったのか、募集対象の条件もつけずに求人広告に今回の募集を載せていたのだ。しかも、事前に報酬を払うとも載せていた『なんか怪しいかも……でもすごく興味ある！』と読み手に思わせるような、好奇心をくすぐる作戦だ。

「ふむ。では次の質問だ」

「はい」

「この職務について、何を身につけたいかね？」

「特にこれといって挙げるものはないですが……少しでも生活に余裕ができればと」

「そうかそうか」

女性の深刻そうな応答に、博士の目にはうつつすらと涙が溜まっていた。

「うんうん、君採用。詳細はあとで連絡するね」

「はいっ」

「うんうん。それじゃ、またね」

「はいっ。ありがとうございます！」

女性がパアッと笑顔を見せると、博士の目にはますます涙が滲む。

女性がうれしそうに応接室を出ると、入れ違いに助手が入って来た。

「博士。どうでしたか……うわっ、何泣いてるんですか」

「いやあ、世知辛い世の中にも負けないで生きようとする人がいるんだなあ、少し感動してしまっただけ」

「博士みたいな俗世とは無縁の人が世の中を語ると、国民が暴動を起こしかねませんよ」

「私も国民の一人なんですが……」

「ははっ。博士に人権があるわけじゃないじゃないですか」

博士の目に溜まっていた涙が、栓が抜けた水道のような勢いで溢れ出す。

「うわっ、何泣き出してるんですか」

「上司を大事にしない世知辛い部下を持つても、私は頑張って生きようとしてるんだと思うと感動してしまっただけ」

「自分に感動しないでください」

「助手は溜息を一つ吐くと、その溜息を追いかけけるようにして応接室を出て行った。」

「ついでに助手の募集もしようかな……」
割と本気で考える博士の姿が、ポツンと応接室の真ん中に置かれていた。

「……失礼します」

次に入って来たのは、博士が指名した最後の応募者だ。

二十代前半のまだ若い男性だが、その若さではありえないほどふくよかな身体をしていた。

「かけたまえ」

博士が促す。

青年が腰掛けると、椅子がキシリと苦痛を訴えるように軋む。

青年が座るのを見届けてから、博士は先程までと同じように口を開いた。

「さて、これからいくらか質問させてもらうが、いいかね？」

「構いません」

「よろしい。今は無職かね？」

「いいえ、役者をしています」

いきなり無職かと聞くのは失礼だと理解したのか、博士はちよつと慌てたように言いわけをした。

「すまないね。君のような、ふくよ……デブを見ると秋葉原にいるバックと紙袋を持った若者たちを思い出してしまつてね」

「はあ……」

お世辞でふくよかは逆に失礼なんじゃないか？ と判断して言い直

したら本心が出てしまった博士であった。

青年は特に気にした様もなく、博士の話の話を聞いている。

「質問に戻ろう。君は何故ここに来たのかね？」

「ええ、役者と申しましたが、小さな劇場でほんの一役やらせていただいていような若輩者です。正直、生活していくのに手いっぱい……」

思い詰めたように青年が語り始める。

「それに、私はこんな……その、役者だとは思われないくらい太っていますし。これは食べ過ぎとかじゃなくて、こういう体質なんです。運動をしても体重は減りませんし……かといって食べても増える訳ではありません」

「ほう。興味深い」

普通に青年を研究対象にしたいと思う博士。

「美容薬品……というのは、ダイエット関連でもそうでなくても、役者である私にとっては損はありません。もし、これで役者稼業にも縁ができればと思つて応募したのです」

「ふむふむ。よろしい。では次の質問だ……と言いたいのだが、先程の答えがそのまま適用されるからいいや」

「は、はあ」

そしてお決まりの文句を博士が青年に言おうと口を開いたが、思う事があるのか、口を閉ざした。

怪訝そうな顔をする青年。

博士はしばらく迷った様だったが、やがて決心したのかニッコリとほほ笑むと青年の肩を叩いた。

「よし、君採用」

「ほ、ほんとですか！」

「うん。私は嘘をついたことがあんまりないことで有名な博士でね」

それは割と世間では普通だ。

「では、詳細は後ほど連絡する。心待ちにしてください」

「はい！」

——こうして、求人広告からひっそりと『美容薬品テストスタッフ』の文字は消えたのであった。

翌日。少し太った月が天高く上った頃。

青年の元へ一通の電話が届いた。

「もしもし、私だが」

「あ、はい。先日はどうもありがとうございます」

「うむ。さて、急だが昨日面接した部屋にまた来てくれたまえ」

「はい。分かりました。すぐに向かいます」

「うむ。ではまたな」

「はい」

博士からのお呼び出しに緊張する青年。だが、これで、役者稼業に一筋の光が差し込んで来た。後は自分の努力次第で結果はどのようになる。青年はバシッと足を叩いて気合いを入れると、博士の元へ急ぐのであった。

例の洋館にて、三人の男が顔を合わせていた。何やらヒソヒソと話している。一人は真面目に、一人は楽しそうに、一人は緊張でガチガチになりながら、一つの瓶を目の前に口を開閉させている。

「さて、これが例の『美容薬品』だ」

博士が指を差した先には、透明なガラス瓶があった。透明度の高い液体が部屋の光を受けてキラキラと輝いている。

「我々は、この薬品に、効力に因んで『ルーナ』と名付けた。語源はラテン語で、意味は『月』だ」

「ゲームしてる人なら誰でも知ってますよ、博士」

「……一晩じっくり考えたのに」

「そうだったんですか」

ネーミングセンスは皆無の博士であった。

「おほん。気を取り直して説明再開だ」

「はい。お願いします」

青年が苦笑していた顔を真顔に戻す。

「この薬は先程言ったように、効力に因んで命名されている。つまり、この薬品の効力は月だ」

「それは、地球での重力をほぼ無視できるということですか？」

「さすがにそれは無理だ。この薬は、『月の満ち欠け』の内、『欠け』の能力に特化した効力を持っているのだ。満月がどんどん三日月になっていく……三日月は新月から三日目に出る月の名前だから、例えにするのは間違ってるな……あれ……二十七日目にする月は何て言った

つけ？」

「分からないならそのままいいですから、早く説明してあげて下さい」

助手が溜息混じりにフォローを入れる。

「むむ。しかたない。とりあえず、要は痩せて行く効力を持っているのだ、この薬は」

「そ、それはいいです！」

「うむ。君は採用されたから、もちろんこの薬を使用してもらうわけだが……何回飲んだのか、どのくらい細くなったのか、きちんと我々に報告するという義務を伴う。わかるね？」

「はい」

しかし、青年は何か疑問を感じたのか、博士にちよつと視線を送つてみる。

「なんだね、気持ち悪い」

「あ、あの……私はずっとここで薬を飲むんですか？」

もしそうだとしたら、しばらく役者稼業は休業という形になる。収入が少なくとも、青年は役者という職業が好きだった。だが、このテストスタッフの仕事で役者稼業ができなくなる……というのは本末転倒だ。青年にはそれが心配で仕方なかった。

「いやいや。そんなことはないよ」

博士が青年の意を汲んだのか、明るい声で答える。

「役者稼業をしてもらいながらいいさ。服用タイミングは全て君に譲渡する」

「よかった……」

青年の顔から不安の影が消えていく。が、今度は好奇心が表情を支配した。

「満ち欠けの『欠け』に特化してことは、『満ち』に特化してる薬もあるんですか？」

「ほほう、よく気がついたな」

博士の言葉には驚きと感心が籠っていた。

『満ち』に特化した方は、違つテストスタッフに渡しているよ。もし、君が痩せすぎてしまつても何とかなるようになっていくさ」

「な、なるほど……」

つまり、もし青年が分量を間違えてしまい、体重が十キロとかになつてしまつても、何とかなると言うわけだ。青年の好奇心は止まらない。

「その薬、どうやって作ったのですか？」

「むむ。確かに内容を明かさないと不安に思うだろうが……申し訳ない。これはまだ公表できないのだ」

「そうですか……」

今度はとても残念そうな顔をする。この青年は知名度の低い役者だが、ちゃんと役者としての素質を持っているようだった。

「さて……これで我々からの説明は終わりだ。良き役者ライフを送つてくれたまえ。ちゃんと報告はするように。念を押すようで申し訳ないが、我々にはその報告がそのまま研究結果に繋がる重要なものだから、くれぐれも忘れないでくれ」

「はい」

博士が満足したように頷くと、助手を連れて応接室から出て行った。

取り残された青年は、しばらく薬品の入った瓶を眺めていたが、やがてそれをポケットにしまうと、いそいそと洋館を後にしたのであった。

青年が自宅に戻ると、机の上に博士から貰った瓶を載せる。応接室ではキラキラと輝いていた液体は、薄明るい部屋の中では全く光を反射させなかった。代わりに青年のキラキラと期待に満ちた瞳が映されている。

「まずは今の体重を量ろう」

ズン

片足を乗せただけで六十キロを超える。

ズンズンッ

両足を載せると、体重計は九十八キロを差していた。

「ははは。よくこんなんで役者とかできるよなー。自分でもびっくりだよ。まあ、いつもデブで苛められてる気の弱い男役だったんだけどね。ある意味びったりさ」

だが、今は博士の薬がある。

「これさえあれば、明日からでも私は主役を張れるようになる！」

青年は瓶の中身を、博士からついでにと渡されたメモリ付きビーカーに移す。

「まずは、このくらいから。いくら痩せられるからって、初めての体験だ……怖いじゃないか」

気が弱い青年は慎重にチビチビとビーカーを傾けて薬品を口の中に

含む。青虫を潰して青汁に混ぜたあと、あまりに苦いからオレンジジュースを混ぜて更に手が付けられなくなったような味がする液体だ。しかし、良薬は口に苦しともいう。青年は我慢して飲みこんだ。

「ふう……衝撃的な味だった。さて、効果はどのくらいだ？」

鏡に自分の姿を映してみる。

「あんまり変わってないな」

あんまりどころか全く変わってなかった。

「一応、体重計のってみるか」

ズンズンッ……びびびびっ

体重計は八十七キロを叩き出していた。

百キロクラスの巨体が十キロ減ったところで、何も見た目に変化が無いのは当たり前だ。

「す、すごい……」

これは、もうちよつと飲んでみてもいいかもしれない。

青年は気を良くして先程の二倍の量をビーカーに注ぎ込む。

「えっと……これで飲む量は……」

飲む前にまずは先程の結果報告。携帯で博士宛てにメールを送る。

「よし、よしよし。いくぜ。私はできる子だ。未来を掴むんだ！」

グイッ

青虫を潰して青汁に混ぜたあと、あまりに苦いからオレンジジュースを混ぜて更に手が付けられなくなったような味がする液体を一気に飲み込む。

「たぶん、この味には慣れることはないだろうな……おおおお？」

一気に重力の影響下から抜け出すような感覚が身体を襲う。確か博

士は地球の重力の影響をほぼ受ける事がなくなるとは——無重力状態にはならないと言っていたはずだ。青年は首を傾げると、鏡の前に立った。

「あ？」

誰だこいつ。

そんな顔をした人間が、鏡の向こうにいた。

しかし、青年の特徴——身体が太ましいということとは除く——はよく抑えてある、どこか青年に良く似た人間だった。

「あ、というかこれ、私だ」

衝撃の事実。というよりも青年があまりにも自分の知っている自分と外見が変わっていたため気付いていなかったただだった。

「お……こりやすげえや」

体重計に乗ってみる

トンッ

「おとおおおー！」

六十五という奇跡の数値を体重計が青年に告げる。

「私……今もしかしてちよつと太めの男性なんじゃね？」

どこにでもいそうな男性が鏡の前に立っている。

「自分で言うのもあれなんだけど、割とカッコいい！」

仮にも役者。身体各パーツのバランスがとれている。つまり、元々の素材は良い。

「すごっ。これ、すごっ。明日……いや、今すぐ劇団長に言っつて配役を！」

部屋を出て、廊下に置いてある電話を取る。

「もしもし、団長ですか？」

「うるせえ、今何時だと思っつてんだデブ！」

「聞いてください！ 私、ついにダイエットに成功したんです！」

「寝言は寝てから言え！」

まったく信用してもらえなかった青年であった。

「そりゃそっか」

一方的に切られた電話を受話器に戻す。

「ま、明日会っつてみればわかっつてくれるよね」

青年は部屋に戻ると、博士にメールを入れてから布団を被った。

数秒後には青年はスヤスヤと眠りについていた。

また少し太くなった白い月が、空で青年を見守っている。

翌朝。

日の出と共に目を覚ました青年は、劇団御用達の小さな劇場に赴いた。もちろんまだ誰も来ていない。劇団の中で一番格下である青年の仕事は、劇団の皆が来る前までに劇場の下準備をすることだった。

日が高く上った頃、ようやく団長の姿が劇場に現れた。

「団長！」

「お？ なんでえ、新入りか。お前さん、新入りの仕事は劇場の下準備だぜ」

「もう済んでます！」

「おうおう、あのデブが今日もやる予定だったんだが……気がきくじやねえか。で、あのデブはどこだい？」

「ここにいます！」

「そうかそうか。んで、お前さん……んん？」

青年の言葉に違和感を感じたのか、団長はしばらく青年を見つめる。

「おおおい！ まさかデブか！」

「はい！」

「いや、そんな元気に返事されても困るんだが……。いやしかし……昨日の深夜に電話があったけどよ、俺はてつきりデブがついに脳細胞まで脂肪に変えちまったのかと思っぴっくりしたんだぜ？ は……すげえもんだわ、これは」

感心している団長。

「おうおう、いいねえ。デ……お前さん、なかなかがつしりしてんじやないか。あれかい、骨格が太いからやたらと太って見えたのかい。鍛えれば実はここまで痩せるもんなのかい？」

「ええ、自分でも驚いています」

青年は博士に前もって薬品の事は口止めされている。至って自然な現象であると言わなければならない。

「でも、おまえさん……これじゃあ、今までやってた配役はできねーな。どうしたもんか……新しいのやるか？ なんか顔も細くなつて男前だしよ！」

「ありがとうございます！」

博士の薬は確かに青年の役者人生を豊かにしたようだった。

青年が新しい配役を貰い、役の練習をしてから帰宅すると、新しい瓶が届いていた。

博士からの手紙も添えてある。

『君の報告から改良を重ねてみた試作品だ。よければこちらも試してくれないか？ 前の薬はこちらで回収させてもらったよ。博士』

確かに、机の上に置いておいたはずの瓶はなくなっていた。

「カギかけたんだけどなあ……」

ボロ家にカギは意味を持たないようであった。それか、博士か助手がとも盗人として優秀なのだろうか。

「ま、何にせよ、これも試してみようか！」

キヤップを開けたところで青年は手を止めた。

「いや、これも効力はすごいものなんだろう。分量を間違えると大変なことになるかもしれない」

相変わらず気の弱い青年は、慎重にピーカーに移していく。

「よし、こんくらいだな。よしよしよし」

チビツとだけ口の中に流し込む。

「うわあ……」

例の青虫を潰して以下略な味の液体は健在だった。

「味の改良はしてくれなかったのかな、博士」

嫌になっちゃうよなーと呟いて、青年は瓶を机の上に戻した。

「鏡と体重計のところにいかなければっ！」

嬉しそうに鏡の前に立つ青年。

「うっひよおおお！ これヤバイ！ 私ってばもう役者から俳優に

昇格してもいいんじゃない？」

そこには、ジャーニーズ事務所顔負けのイケメンが立っていた。

「博士、改良ってこういうことか！ これはすごいや！」

体重計の上に乗ってみる青年。そしてまた数字をみて歓喜の声をあげた。

「これは……五十？ うわっマジ？」

初日から約半分まで体重が削減されていた。

「これ以上飲んだら、ちよっとまずいよな」

博士へ報告のメールを入れた後、青年は考えた。薬の効果は目に見えて分かるレベルに入っている。これ以上やったら、身体に悪影響を及ぼすかもしれない。

青年はダボダボになった洋服を着直してから布団にもぐりこんだ。

「ま、博士には報告しといたし、しばらくは控えよう」

そう呟くと、青年は深い眠りへと誘われていったのであった。

半分になった月が、青年を優しく照らしていた。

二週間後、青年の所属する劇団は青年を花形にして客を集めていた。町中に青年の顔が載ったビラが撒かれ、ネットでも青年の劇団のチケットは即完売だ。知名度は業界トップにまで届いていた。

「はははは！ よくやったぞお前さん！ これで俺達も安泰だ！」

団長はご機嫌だ。

「ええ、もう俺にお任せください！ このまま一気に突き進みましょう」

う！」

青年も、気が弱いという個性はどこにいつてしまったのか、今はとてもハキハキとしている。

「おうおう、いいねえ、そうじゃなくっちゃ！」

「はい！」

青年は十代後半、二十代前半の若い女性たちから絶対的な支持を得る千両役者にまで出世していた。今ではバラエティ番組にまで出演し、青年の役者人生は輝かしいものとなった。

だが、青年は、とあるバラエティ番組でとんでもない女性と知り合ってしまった。とにかく、脂肪をためこんでブクブクに浮腫んでいる女性だ。青年はその女性が一ヶ月ほど前までガリガリに痩せていたと聞いて、すぐに彼女がもう一人のテストスタッフだと理解した。輝かしい未来を掴めたはずの彼女は、痩せていた頃の自分にコンプレックスを抱え、限界まで無駄な贅肉を付けていったと語る。青年にとつてのトラウマである無駄な贅肉が、目の前で人の形をとってプロポーションベツベツという構図だ。

昔を思い出した青年は恐怖した。

これ以上贅肉のある世界にいるのは精神的に危機だと悟る。過去は自分では為し得なかった現在の栄華が、そう思わせたのかもしれない。そして、解決方法は自分だけでも無縁の世界で生きて行くというもうのだった。

今の輝かしい自分に、心理的外傷は必要ない。

人工的に作り出されたとはいえ、ここまで来る過程には、間違いない青年の努力も反映されている。ただ薬に頼ってばかりでは、輝かし

い未来をつかむことはできない。

そして、青年は自らの精神を守るべく、決意を固めたのであった。

青年は随分と豪華になった自宅に戻ると、随分と昔に仕舞ったガラス瓶を取り出した。

「これだ……これをまた飲めば……」

中身を全部ビールカーにぶちまけると、一気に飲み下した。

青虫を以下略な懐かしい味が、喉を通って胃に落ちて行くのを感じる。

「もうこれで、後には引けなくなつたな」

青年の手からスルリとガラス瓶が抜ける。

青年が別に力を緩めたわけではない。身体が収縮していく快感に痺れているわけでもない。

「ああ、そうか」

この現象は、急激に細くなつていく自分の手が、ビールカーの重さを支えることができなくなっただけだ。

青年が鏡を見ると、そこには細い一本の棒が、映っていた。

青年は薬の効力を忘れていたわけではないが、やらざるを得なかった。結果がこうなると知らなかったわけではないが、やらざるを得なかった。分かっていたのに、止められなかった。それほどまでに、青年の心は追い込まれていた。

「ああ」

そして、最後に青年が口だったものを開き、発声器官だったものを震わせて呟いた。

「これで、やっつと。私は解放される」

その姿は薬によつて半ば強引に自信をつけた青年ではなく、人の顔色を伺いながらビクビクする、薬に慣れるまでの気弱な青年だった。

ただ、青年の目には脅えはなく、あるのは解放感による朗らかな光だった。

シュルンツ

青年だった棒状のものは、最初から何もなかったかのように消えていった。

「ふむ。私はやはり人を見る目がないようだ」

「博士。ようやく分かつて頂けて私は嬉しいです」

青年の家の玄関の前で二人の男が話していた。彼らは玄関を開けると、青年が落としたガラス瓶を拾った。

「だが、助手君。これはこれで、いい研究成果だとは思わんかね？」

「はい。おそらくマウスでは多量服用なんてできませんから」

「うむ。しかし、この薬は全然だめだったな」

「何故ですか？」

「これでは彼のような被害者が出るだろう。商品化には程遠いさ。まだまだ我々にはやる必要がある、ということだ」

「はい、博士」

「では助手君。証拠隠滅後、また忙しくなるから頑張ってくれたまえ」

「はい」

博士と助手が青年の家を後にする。

白い満月だけが、持ち主のもういない豪華な家を見守っていた。

——おでぶな男をモテるスリムボディに！

新薬『ルーナ』——

このチラシが撒かれる日が、いつか来るのだろうか。

編集後記

どうも文藝 ajo です。今回は『月』と『音楽』という少しオシャレな二つのテーマで冊子を作ってみました。今回は冊子の都合により、新入生の作品二つと、その他の人で行ったコンペティションにて選ばれたいくつかの作品を載せてあります。

文藝 ajo のコンペで上位に選ばれる作品は、今までの作品を見る限り、大体二種類に分けることが出来て、一つはテーマを上手く使ったショートショート風の短編、もう一つが自分のやりたいことを上手く読者に伝えることが出来た作品です。今回載っているのは大体が後者に属する作品です。そのため今までの無料冊子の中でも、なかなか幅の広い作品集に仕上がっている個人的には感じております。

今年も終わりに近づき、文藝 ajo の今年度の活動もこの冊子が最後です。皆様も年末いろいろと忙しいかと思われそうですが、時間が空いたときにふと手に取っていただけたら嬉しく思います。楽しんでいただけたらより幸いです。

会計 丹家加太男

文藝 ajo 2010 冬冊子 volume.2

2010年12月16日

発行／文藝 ajo

編集／明神明

表紙／明神明

印刷／東洋大学

[Mail:bungei_ajo@hotmail.co.jp](mailto:bungei_ajo@hotmail.co.jp)

[HP\(blog\):heep://bungeiajo.blog14.fc.com/page-1.html](http://blog:heep://bungeiajo.blog14.fc.com/page-1.html)

※なお、今回の冊子につきましては、「文藝 ajo 2010 冬冊子 volume.1・volume.2」の二冊に分けて発行させて頂きました。是非 volume.1 の方もお手にとってお楽しみください。